成城水泳部発達史

旧高第3回
S6年卒業　鈴木忠夫

今回50年誌発行にあたり水泳部初期のことを書くことになったので、水泳部が確立した昭和5年からとその以前とに分けて書くことにする。幸い昭和13年頃部誌を発行する積りで書いてあった原稿があるので、それを基に自分のつたない記憶と幾拾年もたった書類を引張り出して書く。

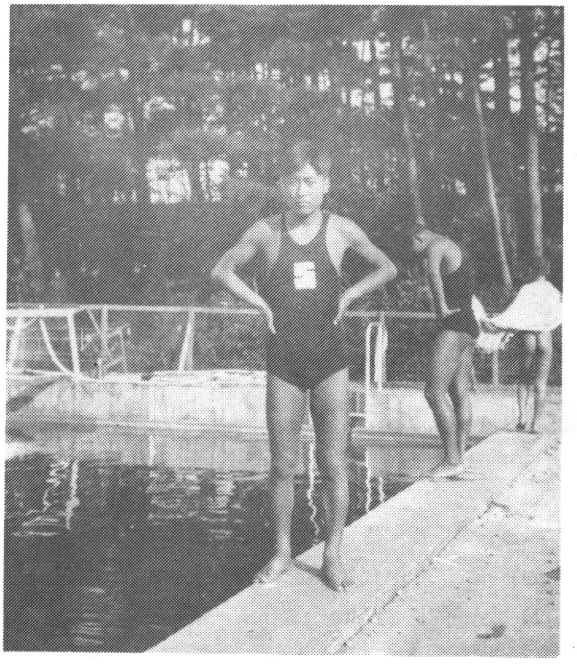
成城水泳部発達の跡を顧りみるに、昭和3年以前に於ては部の年中行事は夏の海水浴に過ぎず、取立て書くことがないし、自分は知らない。部として、又先生生徒の間で水泳の発達に眼を向けるに至ったのは昭和4年以後である。今昭和3年から昭和4年の終りまでを揺籃時代として書いてみよう。

揺籃時代（昭和3年）

昭和3年の夏まで水泳部は普段は何もせず夏になると同好の者を募り、一週間か二週間、ある年は伊豆方面に、ある年は房総方面へと適当な場所を求めて遊泳をしていた。我々は夏の水泳も今迄と趣きをかへ、合宿や夏期学校として規則正しい生活の中で、泳法を教へ心身を鍛えた。水泳の好きな者を集め、他のスポーツと同様に、心身の鍛練の為の道場としてプールが欲しいものだと、当時理甲一だった我々は寄るとその話をしていた。又、夏に於ける合宿もあちらこちらと探すことなく、適当な地に合宿する場所と水泳場が欲しいものだと地図をにらみっこしたものだった。

かゝる雰囲気にあった我々を実現へと努力せしむる動機をあたえてくれたのは、その年の9月植物採集のために三崎の臨海実験所にゆき、飯より好きな連中が共に泳ぐ機会が得られたからであった。以後日記に水泳の事が書れてあるのを引き抜いて、その当時を想像してもらおう。

昭和3年9月22日　曇　霊岸島より99噸の木造船に乗りノロリノロリと、まるで海をはう様にして目的地に着いたのが午後3時。講義が終ると早速用意の褌をひっぱり出して、水泳好きの真野、味岡、渡辺それに僕と4人は早速泳ぎにゆく。「さあ飛び込もう」「よし」と言い終るやザブン、ザブンと次ぎから次ぎへと泳ぎ出す。夕食時分になったので寄宿へ帰る。おなかがぺこぺこなのでどしどし食う。夕食後茶話会が開かれる。食べたばかりなのに又食う。まるで底なしのようだ。その中に誰かが「泳ぎに行かないか」という。早速賛成して用意をする。他の連中は「寒いからよせ」というのを「なに、月を見ながら泳ぐのも一興だ」といいながらかけ出す。海岸へ着くやさっそく飛び込んだ。夜光虫のため、きらきら光り出す、昼より早く泳げる様な気がする。10時頃寄宿舎へ帰ってこんどは蒲団をつんで高いところから飛込みの稽古をする。「今のは2点、3点」と皆夢中でやる。床についたのが11時。あとは白河夜船。



9月24日　晴　帰京前の寸暇を海で過す。楽しかりし3日間。東京に着いて別れ際皆のいった言葉は「こんどはどこへ泳ぎに行こうか」ということだった。

10月11日　木曜　三橋、真野と共に国際水上競技出場のため練習中であった高石、ワイズミューラー、鶴田、ラード、マンヘル、入江、ワイヤット、ラッファー、佐田、宮下、渡辺それに飛込みのミーニー、高階、水谷、島崎等の練習振りを見に行く。さすが世界的選手だけあると驚嘆する。アルネボルグが姿をみせなかったのは期待して居ったので残念だった。

10月13日　土曜　明日は成城の運動会で行けないのでせめて今日一日だけでもと先生にお願いして、少

し早目に学課を切りあげてもらい、一同玉川プールへ国際水上競技大会を見に行く。遅れてはというので皆会場まで走り続ける。スタンドが足りないので丸太を組合せ、その上に板を張ってある粗末なもの。それでも自分の席について各国出場選手をスタンド越しにながめた時、この上ない満足と水泳に対する情熱で胸が一杯になってしまった。

10月15日　月曜　今日は慰労休暇。真野、宮沢と3人で豊島園へ泳ぎに行く。朝からどんよりした薄曇りその上プールは公開していないので、水は汚く底はみえず、時々魚が泳いでいるのが見える。その中で一日クロールをやったり飛込みの練習をしたりした。多数小学生が来て居て大喜びだった。帰えりに雨にふられる。

10月22日　月曜　久しく懸案中であったプール設計図が出来たので真野、味岡、清田と僕の4人で小原先生にお願いに行く。先生も主旨には大いに賛成して下さったが、学校に金がないから、半分何んとかすれば半分は先生が出して下さるとの事、大いに意を強くして帰る。如何にして金を集めるかに就いて高松先生を初め一同相談する。

10月23日　火曜　塩原への修学旅行。宿につくや「この附近に万人風呂がある筈だが何処か」と聞く。「山を越したところです」といわれたが元気を出して真野、味岡、渡辺と4人ででかける。万人風呂は長さ20米位。きれい汚ないを超越して泳ぐ。何にしろ湯なので皆ふうふうになってしまった。

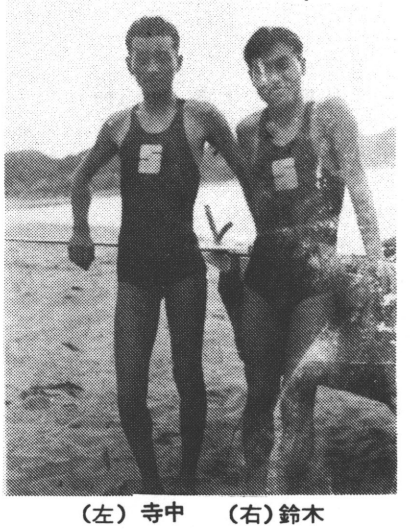
私の日記は以上で昭和3年を終っているがこれで全部でないことは、勿論である。然しこれまでのことでわかるように、昭和3年後半に於て我々はプール建設と夏の海の合宿所設立を目標として努力する一方、泳ぐ場所と機会さえあれば、如何なる困難があってもそれに打勝って泳いだ。これは水泳に対すると同時に、水泳部に対する我々の限りなき愛着と心から我々を指導し助力して下さった水泳部長を初め、諸先生の愛情により為されたものであり、それが実を結んでプール竣工となり、興津の合宿所完成となったものであると確信している。この熱と努力は昭和4年に至り一層強められて来た。又水上日本として考える時、朝日新聞主催の国際水上競技は、我々に世界水泳のレベルを知らしめた点で、大いに貢献すること大であったと考える。

昭和4年

昭和4年に入り、初めは日記が殆んどブランクが多い。その内から書き抜いてみよう。

4月12日　金曜　雨　学校を出る頃から雨がボツボツ降り出した。一度決めた以上行こうというので真野、渡辺と3人で豊島園に泳ぎに行く。着いた頃は風雨烈しく入園を拒絶された。押し問答の上入れてもらい泳ぐ。水はつめたく上ると、ブルブルふるえ、歯までガツガツいう。2時間位泳いだ後、うどんをたべ暖をとりかえる。

5月14日　今日は春の旅行。我々河童の主張せる伊東は否決され箱根へ。宿に着くや強羅にプールがあるのを聞き、真野、渡辺と3人で電車に乗り強羅に泳ぎに行く。水は昨年のまゝでオタマジャクシが先客で泳いで居た。しかたなく共に仲よく泳ぐ。以上の様に我々は水泳シーズン前から機会をみつけて泳ぐ。我々の第一目標であるプール建設、夏の合宿所設立に対する努力は一層烈しくなって来たが、我々の級の中には身体の具合や他部との関係上直接水泳部に関係出来なくなるものも生じて来た。しかし残った真野と僕は、当時の水泳部長であった高松先生や水泳部関係の先生と共に、初志を貫徹する決心をし色々相談した。結局のところ成る成らないは資金関係であったので、食堂の前に竹籠をさげるとか又父兄を訪問して寄附をあおごうかなど、色々計画をたてたが色々の事情で実現出来なかった。この頃から今の級の同好の者を失ったがこんどは下級の人達で我々の考えに賛成して呉れる者が出て来て級単位だったものが、学校中の同好の集りとなり次第に現在の水泳部の形態をかたち造るに至ったのである。勿論水泳部というものはあったらしいが、部には委員がいてその人達が夏の水泳の世話をするだけで部員のようなものはなかったと記憶している。



（左）寺中　（右）鈴木

こゝで我々は、来年よりインターハイに出場しプールもそれまでに間に合せ様という計画をたて、同時に今年は夏の水泳に力を入れることを先生とも御相談申しあげ、賛成を得た。

先ず夏の海に於ける泳法その他に改善を加えることとし着々計画を進めた。

6月の初めから夏の水泳はどこで行うかと色々探したがいゝ場所がみつからないので、今年も興津ということにし、宿の選定及行事計画などをたてて募集したところ、応募者が非常に多く100名を突破するに至った。

我々はこれに力を得て設備などもよくととのえるつもりで先発隊をつくり、皆より2日前に東京を出発することにした。次で興津河童日誌を書く。

7月15日　月曜　真野、長与（俊）、長岡、加藤に、僕の5人が先発隊となり、午前8時23分両国駅を出発11時29分上総興津に到着。初めての町なのでどこに何を売っているのか見当もつかない。先づそのあたりの変な店で昼めしをたべーまづ賄の林の家に落ちつき計画をたてる。手分けをして町に買物にゆく。まづ竹を買って来て小さく切り麻縄をとおしてコースロープを夜おそくまでかゝって作った。

7月16日　火曜　晴　水泳には好適な日向である。炎天に身体をさらしながらターニング台脚立を搬ぶ。僅か5人であの重い奴を海岸まで運ぶ。肩は痛いし日はかんかん照るし大変こまった。さて海に出したところが造り方がうまくないとみえてすぐひっくりかえる。しかたがないので石を搬んだり、俵に土を入れたりしておもしを造り、それに結びつけた。かくしてどうやら準備が出来たので夜は宿の割あてをする。

7月17日　水曜　朝5時に起きて海岸にテントを張り、我々の時と同時刻につく一同を迎へに行く。一行は高松先生、森先生、小野先生、畠山先生、野沢先生を初め高等科2年から尋常科1年迄、約百余名それを昨日の割あてに従い分宿させる。我々幹部は米屋の離れに頑張る。

午後2時より、進級試験（新しくつくった遊泳教授要録参照）を行う。4時のおやつはあづきだった。夜は野沢、真野、僕でコーチャー会議を開き進級を決める。

7月18日　木曜　波は少しあるが天気は良い方、9時30分より水泳練習をする。昨日進級試験を受けない者の試験をして正午進級発表をなし、級別の帽子をくばる。進級者仮2級2名、仮3級9名、仮4級37名、5級28名、級外8名。

7月20日　土曜　午前中進級試験及び水泳練習をなす。午後雨のため水泳練習を休む。一同宿でトランプ、読書をなす。なかには角力などをとる元気ものも居た。夜先生方は森邸へ行かれる。

7月21日　日曜　午前波のないのを幸い一哩の遠泳を行う。一同2列になり元気よく泳ぐ。所要時間45分成功者42名落伍者11名。

午後水泳練習を一時間で終り、午後2時30分より森氏工場の人達と野球の試合をなし勝って成城健児の名を掲げる。夜明日の水泳大会の準備をする。

7月22日　月曜　晴　水温　28℃　波穏やかにして水温かな、絶好の大会日より、午前中水泳練習をなし午后よりいよいよ待望の遊泳大会を開催する。

召集係　小野先生

出発合図員　野沢先生、鈴木、真野

審判員　森先生、野沢（弟）、畠山先生、長与、長岡

記録員　尾形、落合

海中にターニング台を置き距離を25米にする。種々競泳をやり、最后に西瓜取りや桃とりをなし盛会裡に大会を終る。夜は前期の人達のために別れの茶話会を開き気炎をあげる。

7月25日　午前中軽い練習をなし、午後興津海岸より守谷海岸までの三哩遠泳をなす。沖で三角波に会うも皆元気よく泳ぎきる。所要時間1時間45分成功者28名、落伍者1名、海岸でココアをのむ、うまいことこの上なし。夜は興津の海水開きなので興津の町へ乗り込み福引角力などをみる。

7月26日　晴　午前中進級試験をする。午後は野澤コーチの発案により、市立水泳場までクロールで泳

ぐ。市立の連中これをみて驚いていた。

7月28日　午前中脚立ターニング運搬をなしその後帰京の準備をさす。午後泳ぎたい者だけ泳いで一行は4時の汽車で帰京。野沢先生、真野、長与、長岡と僕の5人は終仕末のため残る。斯くの如くして興津の水泳も非常に盛会裡の内に無事に終了した。興津の海の水温は前半に於てつめたく波も少しあったが後半に於ては非常に水温も高く、波も静かで水泳練習には好都合であった。本年度の水泳合宿からして色々教えられる点が多かった。先づ指導上からも又衛生上の見地からしても我々寄宿舎の如きものがどうしても必要であるという点が今迄より一層強く頭にきざまれた。又賄も学校からつれて行く方が良いとか、水泳期間を考えるとか、細かい点に至っては数かぎりがない。

9月に入り新学期が始まるや、夏海で得た水泳の友達と共にある時は豊島園に、ある時は落合プールへと泳ぎに行った。9月に入ってからの日記を引っぱり出してみると、

9月11日　木曜　雨の中豊島園に泳ぎに行く、丁度インターカレッヂ前なので慶応、法大、北大が盛んに泳いでいた。

9月16日　火曜　落合プールに泳ぎに行く。室内プールなのであがってからが暖かく気持がよかった。

斯くの如くして同好の友が次第に集い水泳部を形づくる基礎が出来上り、来年度から全国高校水上競技大会にも出場可能の如く思われるに至った。勿論初志を貫徹させるには今迄以上に棘の道を歩まねばならなかった。其の当時の我々は、それを覚悟していたしそれを貫徹した時の喜びを思いうかべ努力した。ここに一寸おことわりして置きたいことはこの発達史を書いている内に記録に於て興津遠泳成功者とか進級者名がない。これはかって自分が昭和3年から昭和5年迄の水泳部史を書いたことがあったが、回覧中紛失し、細かい記録を失ったからである。だからこんどの部史は手許に残ったものと記憶によるものであることをお含み願いたい。次に今回制定した遊泳教授要録を書きとめた。こんごの参考になれば幸いである。

游泳教授要録

1）一意実力の養成を旨とし各派より専ら実用的泳法を抜き、之を必須科目とし其他の諸泳法は随時之を授け以て必須遊泳法の円熟を期す。

2）遠泳、ウォータポロ、其の他の遊戯は遊泳の興味を振起しかつ胆力修養の助けとなり練水の効あるを以て力めて之を行う。

3）一級以上の者を研究生とし広く遊泳術及教授法の研究に任じ、以て各派を統一し日本に於ける完全なる遊泳法を作ると共に完全なる教授法を定めんことを期す。

級別　級外（赤帽）　五級（白帽赤線二本）　四級

（白帽赤線一本）　三級（白帽）　二級（白帽黒線一本）　一級（白帽黒線二本）

游泳教目

級外－全く浮くこと能ざる者級外生とし身体を水に浮ばしむることを学ばしむ。面かぶり、犬游

五級　扇平游　蛙平泳　扇横游（一重伸略体）

四級　扇横游一段（一重伸）　同二段（二重伸）　早抜手　小技手　クロール初歩　立泳　潜水　直跳　平跳

三級　扇横游一段　同二段　片抜手扇横泳一段（片抜手一重伸）　片抜手扇横游二段（片抜手二重伸）　扇平游一段（平伸）　諸手横泳　早抜手　小技手　クロール　ブレスト　立泳　潜水　平跳　逆跳

二級　互技手（大抜手）　手繰横游　片抜手横游　クロール　バック　ブレスト　逆跳　辷跳　立泳　潜水

一級　諸流游法

潜水及遠泳

名＼級	級外	五級	四級	三級	二級	一級
潜水	○	○	三間	五間	七間	十間
遠泳	○	五町	二哩	三哩	五哩	七哩

游泳区域

赤線以内にて各級指定の場所内にて游泳するものとす。

進級　コーチ、助手協議の上随時これを行う。進級標準は其の級に定められたる游法の修了と潜水、遠泳とによる。

基本的泳法概説

犬游

第一　両手にて水面上に横たへる竿を握り腕を延して体を水に浮し、左右の脚をかわるがわる屈して足の甲及脛を以て水を打つ之を蹴足と云う。

第二　充分に吸気をなし顔を水に浸して蹴足をなし同時に両手を以て替る替る水を掻く。

第三　第二に於て体が充分に水に浮くに至れば徐々に顔をあげ額より目、鼻と順次に表はさんことを試むべし、斯の如くする時は遂に口を開きて自由に呼吸し得るに至るべし之を犬游と云う。

扇横游

足の運動　直立せる棒を両手に握り体を横にし、足を揃へて十分に伸し水面近く体を支持すべし、先づ第一に膝を屈しつつ前後に開き、両趾端を成るべく遠くより合するつもりにて水を挟み上になりたる足の裏と下の足の甲とを合すべし之を扇足と云う。

手の運動及全運動　水を枕にして横臥の体形を採り、左右の手は肱を張ることなく指をつけ掌を下にして、右肩の前方に並べ、足を扇ると同時に左手を以て充分水を後方に掻きて、左内腿に収むると同時に右手を進路の方向に真直に伸すべし。伸び終らんとするに及んで、徐々足を屈すると同時に左手は体に近く右手は掌を以て少しく水を下方に圧しつつ右肩前に並ぶべし。

扇平游

足の運動　前游泳法と異なるところなし。極めて柔に動かし体の上下せざることを要す。

手の運動及全運動　此の游法は体を平にし、頭を前方に向け腰を少しく右下に捻り両手は胸前適宜の位置に並べ足を扇ると共に静かに前方に伸し、足を屈すると共に各掌にて水を少しく圧する気味にて左右に半円形を書きつつ胸前に持ち来り次の運動に移るべし。故に手は只体を浮ばしむる助をなすのみにして、単に足の力により前進するものなり。

扇横游一段

扇横游の先方に出せる右手を伸の止まざる間に直に右外腿に扇り収むるものなり。

扇横游二段

扇横游を行ひ受手を左内腿に収めずして外腿に置き、再び扇足を行ひ伸未だ終らざる中に先手を右外腿に扇り収むるものとす。

片抜手扇横游一段

扇横游の左手を右外腿の上に掻き抜き、直ちに右耳下の所に持ち来り先手を右外腿に扇りつくるものなり。

立泳

体を直立せしめ股は左右に開き膝を曲げ足先の力をぬき、足蹠を以てやや後方に水を互に踏み下踏み下したる足は力を抜き水の抵抗少き様に高位に復すべし。

潜水法

第一　両手にて水を上後方に掻き片足（片蹴潜）又は両足（蹴潜）を以て水底を蹴りつつ水中を進行するものとするものなり。

第二　平游の形にて顔を水底に向け足を扇ると同時に両手にて頭の前方より両側に水を後方に掻くべし、手を再び頭に持ち来る間に小なる蔽足を数回行い然らざれば体水面に浮ぶことあるべし。

跳込法

「送跳」　両趾端を以て充分に飛台を蹴ると同時に、両手を伸して頭を挟み之を下にし水に跳び入る。

「直跳」　左手を股間に置き右手は真直に垂らして外腿につけ直立の姿勢にて水に入る。

「平跳」　足を屈して前後に開き体を水面と45度位にして両手を揃へて前下方に出すか左右に拡げ掌を以て水を打ち低所より跳ぶに用いられ水中に没せざるを特色とす。

游泳時間

午前　自九時至十一時　　午后　自二時至四時

游泳場厳守事項

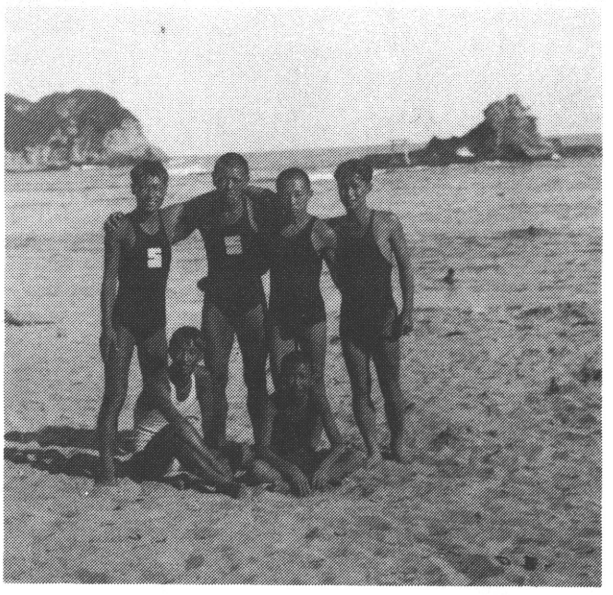
1）規定時間外は個人にて絶対に泳がぬ事。
2）正規の帽子をつけずして練習することを得ず。
3）游泳区域を犯すべからず。
4）游泳時間中無断にて游泳場を出るべからず。
5）游泳場にありては必ず指導者の指揮に従うよし。

創設時代（昭和5年）

昭和3年4年と水泳同好者が増加し、水泳部が設立することが出来る様になった。昭和5年僕が3年になると同時に水泳部員を集め部の確立と念願のプール完成夏期学校宿舎の完成に努力する。と同時に今年より全国高等学校水上競技大会に出場すべく規則正しい練習をすることとした。当時の水泳部のメンバーをしるすと

水泳部長　高松三二先生
水泳部委員兼マネヂャー　鈴木忠夫
主将　三橋達郎
部員　鈴木忠夫、真野国夫、三橋達郎、臼井誠、長与俊一、河野貞二、中村徹雄、佐久間泰三、深水正朝、白山道成

であった。当時プールがなかったので帝大プールとか、他のプールに通い練習を行った。



興津夏期水泳学校

新しく特筆大書されることは我々の念願がかない興津守谷に三軒の合宿所が出来た（後に浩然荘と名づけられた）。皆が一ケ所に集って、安全に連絡のよい楽しい生活が出来る様になった。この時の記録は前に述べたとおり皆無であるが、7月15日から29日まで行われ、コーチは野沢先生と僕であった。付き添いの先生は銅直先生、森先生、小野先生であった。僕は全国高等学校水上競技大会当日の26日は早朝興津を出発して一行に参加したことをおぼえている。

第3回全国高等学校水上競技大会東部予選

（於　神宮プール）

部員ははじめて合宿し、はじめての競技大会であった。

第1日　7月26日

(2) 400米 free予選　A組に河野貞二　6′59″
B組　真野国夫
C組　佐久間泰三　6′39″
予選にて3人共落ちる。

(3) 100米 free予選　A組　三橋達郎　3着1′11″
B組　長興俊一　1′19″6
C組　臼井　誠　3着1′13″
三橋・臼井予選通過。

(4) 200米 breast予選
C組　中村徹雄　3′47″　（落選）

(5) 200米 free予選

A組　佐久間泰三　3′04″2　（落選）

B組　三橋達郎　2着　2′47″8　（入選）

C組　臼井　誠　2着　2′46″　（入選）

(6) 100米 back予選

A組　長与俊一　（落選）

(7) 800米 free予選

B組　河野貞二　5着　14′31″　（落選）

(8) 300米メドレー

成城（三橋・中村・臼井）omitとなる。

第2日　7月27日

(1) 200米リレー決勝

成城（臼井・三橋・長与・佐久間）　4着　2′4″8

(2) 100米 free決勝

三橋達郎、臼井　誠　4着　1′10″0

(5) 200米 free決勝

臼井　誠　3着　2′43″4

三橋達郎　6着

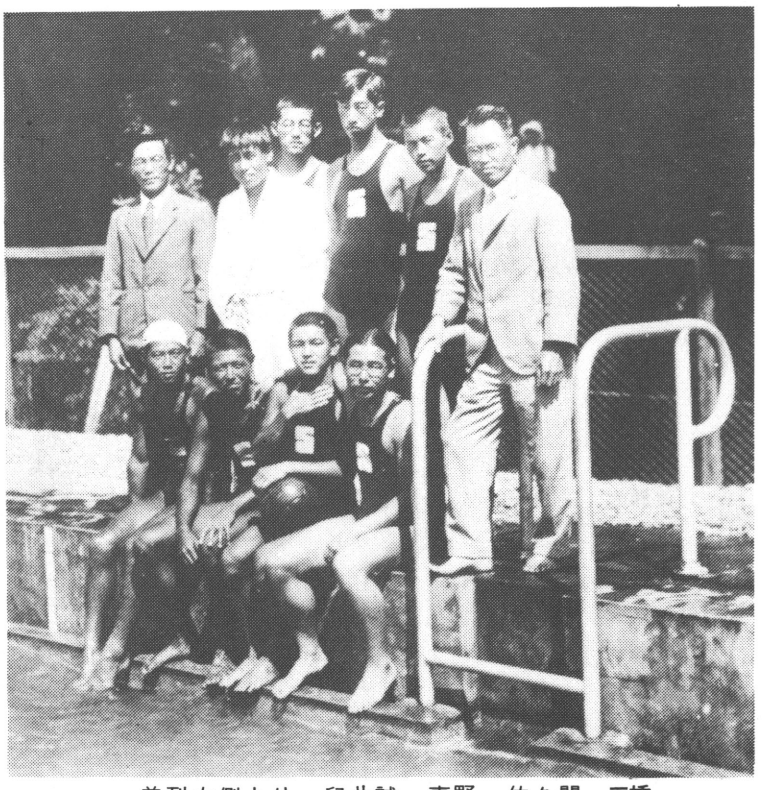
(8) 800米リレー決勝

成城（真野・臼井・三橋・佐久間）　5着　10′59″8

以上のような結果に終った。

この様に思い出多いインターハイも興津の合宿も無事終了し、ホットして一日学校のプール進行状態を見にでかけた。その頃、プールは大部完成に近づきコースラインのタイル敷きの最中だった。プールの上から中を覗き込むとコースロープの真下にコースラインが作られつつある。驚いて高松部長のところへ注進すると、「そんなはずはない」と悠然たる態度。無理にプールにおつれし実地証明した。「これは大変」と云うわけで監督を呼んでやり直しを命じた。その時監督さんいわく「ランニングは線と線の間を走るからこれでいゝんだと思いました」。

こんな訳でもう一日おくれて僕がプールへ行っていたら、成城には世界無比の珍プールが出現していた事だろう。しばらくして無事プールが完成し、9月13日プール開きをすると云うのでその前日部員は大童になって準備している最中に暴風雨になってしまった。それでも互に励ましあって、雨の中を褌一つで、小学校から椅子を搬ぶやらして終ったのが夜の8時頃。前の小川はあふれて膝位まで水がある。しかたなく褌一つで頭に着物をのせて、昔の大井川の川渡りを実地にやって、駅前のそばやへ走り込んだのを記憶している。



前列左側より　臼井誠、真野、佐久間、三橋

後列左側より　森先生、鈴木忠夫、中村、長与、河野、高松先生、S5年　帝大とポロの試合

9月13日　プール開き。第一回校内大会。昨日の暴風雨も去り素晴らしい日本晴れ。青々と水のみたされた新設プールに白線のコースロープがあざやかに浮き出ている。小原先生の挨拶の後、水泳部万才をさけばれた。万感胸をうつものがあった。四方拝のためプールの一隅に立った時は何んともいえない気持だった。四方拝を終って水から上った真野、長与、臼井に僕の4人は相互に手をとり喜び励し合った。その后日本泳法を披露し、そのあと校内大会にうつり競技が行われた。

9月26日　帝大と水球の試合をし、3：1にて成城が勝つ。後半、臼井、佐久間足がつり、あがったがよく戦った。

昭和5年の行事は以上で終っている。

昭和6年

昭和6年1月28日水泳部としてはじめての送別会

が行われた。本年度の陣容は、

水泳部長　高松三二先生

監督コーチ　鈴木忠夫、真野国夫

マネヂャー　杉浦紀雄

主将　臼井　誠

部員　臼井誠、長与俊一、河野貞二、深水正朝、長与謙二、中村徹雄、佐久間泰三、白山道成、姉歯二郎、鈴木勝太郎、内丸正三、寺中廉

今年からは学校にプールが出来たので毎日スケジュールをきめて練習をし、定間隔に部員でプール掃除をした。プール掃除といえば、今考えても仲々の難苦行であった。水泳部員高等科も尋常科も総出で、褌一つで集り水を抜き底にたまった泥水をくみ出し、プールを柄つきたわしでこする。水をはりカルキで消毒した。皆元気に一生懸命やってくれたことが目に浮ぶ。

成城高校尋常科対東京高校尋常科競技大会（於成城プール）6／30

150米メドレーリレー決勝

2着　成城（大西・河野・中西）　2′1″9

200米自由型決勝

1着　大西真博 3′6″1、3着　河野貞三 3′12″3、5着　岡見如雪

100米平泳決勝

4着　河野貞三、5着　斉藤裕、6着　伊藤泰三

50米自由型決勝

3着　中西敏雄 35″5、4着　中村俊平、5着　吉沢利正

100米自由型決勝

1着　大西真博 1′22″4、3着　河野貞三 1′25″2、5着　中西敏雄

200米リレー決勝

2着　成城　1′27″3

7月9日より全国高等学校水上競技大会に出場するために合宿に入る。田上宅が12日迄都合が悪いため平井宅にとりあえず合宿する。合宿の記録は略すが前半天候悪く水温冷たく困難をきわめた。21日主将会議で組合せが決る。

7月25日　第4回全国高等学校水上競技大会東部予選（於神宮プール）

400米自由型予選

A組に河野貞二B組深水正朝C組笠原泰三が出場したが、河野4着、深水5着、笠原6着で落選。

100米自由型予選

A組に長与俊一C組鈴木勝太郎が出場。長与は5着で落選、鈴木も1′16″で措くも落選。

200米胸泳予選

A組に中村徹雄、B組白山道成、C組姉歯仁郎が出場し、中村は1着で3′33″4、白山は3着で3′19″0で入選し姉歯は落選した。

200米自由型予選

A組に臼井誠、B組に長与俊一、C組寺中廉が出場し、臼井は1着2′36″8で入選し他は落選す。

100米背泳予選

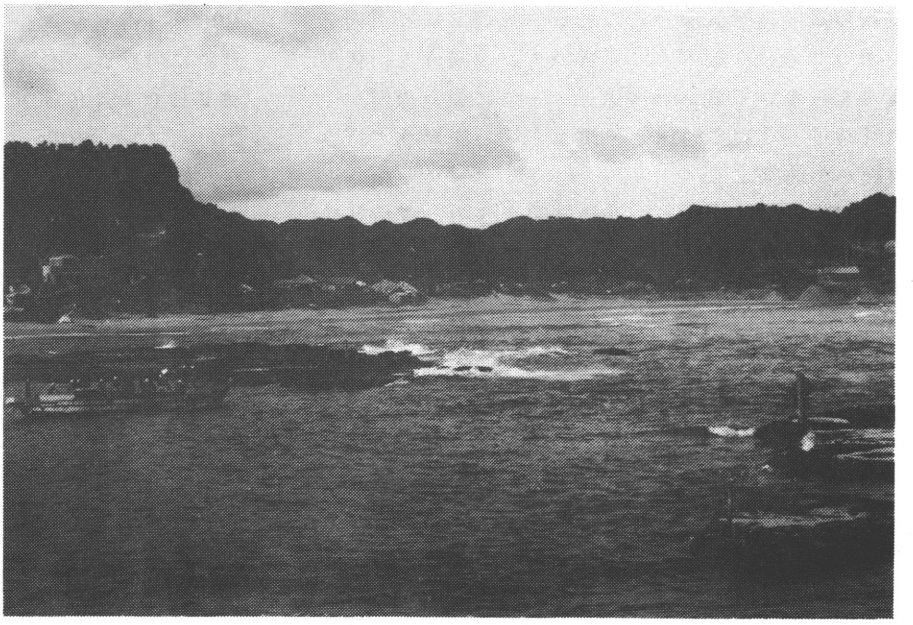
A組に内丸正三、B組鈴木勝太郎、C組臼井誠が出場し、鈴木は1着1′24″2、臼井も1着1′24″2で入選。内丸は落選す。

800米自由型予選

A組河野貞三、B組深水正朝、C組笠原泰三出場するも措しくも落選する。

300米メドレーリレー決勝

1着　八高 4′3″6、2着　静高 4′3″8、3着　成城（臼井・白山・長与）4′11″0



興津　守谷海岸風景

7月26日（第2日）

200米リレー決勝

1着　八高 1′57″4、2着　一高 1′59″8、3着　成城（臼井・長與・河野・鈴木）2′5″4

200米胸泳決勝

中村徹雄、白山道成が出場したが中村は5着 3′33″0であり、白山はオミットされた。

200米自由型決勝

1着　小出（八高）2′29″0、2着　臼井（成城）2′33″8、3着　守井（八高）2′36″8

100米背泳決勝

1着　松岡（八高）1′22″4、2着　山田（八高）1′25″2、3着　臼井（成城）1′26″0、5着　鈴木（勝）（成城）1′28″4

800米リレー決勝

1着　八高 10′32″8、2着　一高 11′18″0、3着　静高 11′37″0、4着　成城（臼井・長与・河野・笠原）11′40″0

興津夏期水泳学校　7月16日～30日

7月15日　雨　午前8時23分両国発にて大西、芝辻、上野に僕の4人先発隊で出発、午前11時29分興津着。雨なれど準備をととのえる。夕方森先生より電報あり、出発を18日に延期する。寒いことおびたゞしい。

7月18日　正午頃一行興津に到着。本年度コーチ・鈴木忠夫、引率者・銅直先生、森先生、田中先生、小野先生。午后は軽く水に入れる。

7月19日　進級試験を行う。正午発表2級は大西と中西の2人、3級6人、4級22人、5級6人、級外4人だった。午后からスケジュールに従い練習。

7月28日　3哩の遠泳を興津より守谷海岸まで行う波静かで泳ぎよし。

7月29日　午前中寒いが進級試験をする。午后は海中大会を開き、夜は茶話会花火をあげる。

7月30日　午前中水泳練習、午后4時で帰京。

宿舎規定

6時30分	起床
7時	朝食
9時～11時	水泳練習
12時	昼食
2時～4時	水泳練習
4時	おやつ
6時	夕食
9時30分	就寝

9月11日・12日　第2回校内水上競技大会

成城高校水泳部主催で第2回校内水上競技大会を開く。会長高松先生、副会長森先生、内田先生、審判長鈴木忠夫、水泳部員が役員を受持って盛大に行われた。

第10回全国学生水上競技大会

第1日（9月18日）

400米自由型予選

B組深水正朝、C組河野貞二、D組笠原泰三が出場し河野は3着 6′19″6、笠原も3着 6′36″で入選したが準決勝で落ちる。

100米自由型予選

B組に渡辺博、D組に長与俊一が出場し落選す。

100米平泳予選

A組に中村徹雄、D組白山道成が出場し白山が3着 1′32″ で入選せるも準決勝で落ちる。

50米背泳予選

B組に鈴木勝太郎1着 36″6 で入選す。

800米自由型予選

A組深水正朝、C組笠原泰三出場するも何れも4着で落選す。

50米自由型予選

A組利光一久、C組渡辺博、D組長与謙二出場する。利光3着となり入選す。

200米自由型予選

D組に河野貞二出場し3着 2′49″8 で入選せるも準決勝で落ちる。

第2日（7月19日）

200米リレー予選

成城は3着 2′2″6 で入選決勝に進む。

200米平泳予選

A組姉歯仁郎、B組中村徹雄、C組白山道成が出場せるも措しくも落選す。

100米背泳予選

A組鈴木勝太郎出場し、1着 1′26″4 で入選する。

第3日（7月20日）

50米背泳決勝

1着　松下（商大）35″6、2着　鈴木（成城）36″8、3着　山口（国大）37″2

100米背泳決勝

1着　松下（商大）1′20″0、2着　鈴木（成城）1′22″6、3着　山口（国大）1′24″0

200米リレー決勝
成城高校は6着となる。

昭和7年

水泳部の陣容　　部長　高松三二先生
監督コーチ　長与俊一　　マネジャー　長輿謙二
主将　笠原泰三
部員　笠原泰三、深水正朝、長輿謙二、中村徹雄、白山道成、姉歯仁郎、鈴木勝太郎、内丸正三、寺中廉、河野貞三、河村秀利、波多野雄二郎、森清、酒巻敏雄（中西）

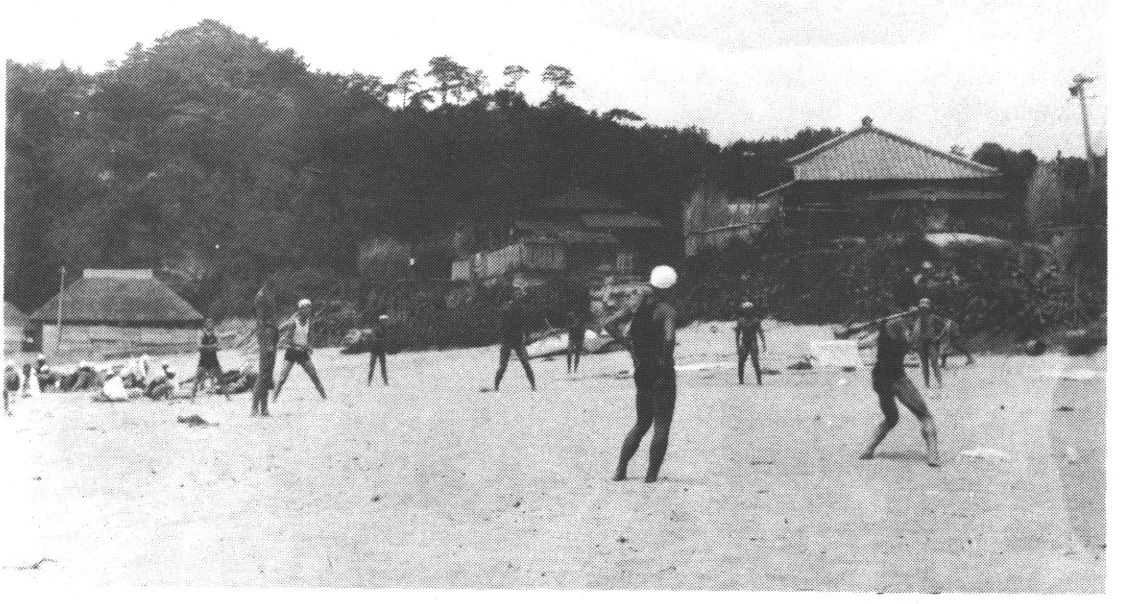
7月に第5回全国高等学校水上競技大会東部予選が行われたのであるが記録がない。

興津夏期水泳学校が7月15日～29日興津守谷海岸で実施された。コーチ・鈴木忠夫、助手・寺中廉、中西敏夫、大西真博、引率先生・森先生、内田先生、小野先生、楠先生、小山先生、清水先生。

7月17日　雨天のためデンマーク体操、インドアボールを為す。午后は進級試験をする。

7月20日　午后遠泳をなす入水3時16分脱水3時34分、遠泳はじめる頃より風もなぎ波は高かったがくずれず3人程落伍の外全員泳ぐ、あがってくず湯をのみ温まる。

7月21日　朝9時頃波高く風強く遠泳に不適当かと思われたが9時半頃より風もないだので3哩遠泳を行う。途中三角波に会い落伍者多し午后は水泳練習を休む。



水泳学校恒例のインドアボール

7月22日　午前進級試験をする。午后は水泳大会を行う。夜は進級発表。賞品授与。遠泳成功者に賞品を与える。

7月23日　午前午后自由練習。午前11時29分後班来り前班は午后4時12分でかえる。

7月25日・26日　水泳練習、水温もよく絶好のコンディションである。

7月27日　午前水泳練習。午后進級試験をする。

7月29日　午前ターニング台脚立を寄宿舎内へはこび帰京の準備をする。仮2級山口宗樹、前田光輝、鈴木二郎の三人であった。

第3回水上運動会　9月16日・17日

本年も例年通り本校プールで2日間に亘って水上運動会が催された。会長は小原先生。副会長小出先生。高松先生、僕も呼ばれて審判長を命ぜられ水泳部の部員が役員を手分けした。
水上競技の他水球の校内大会模範試合。梨取りなどがとり行なわれ楽しい2日間であった。

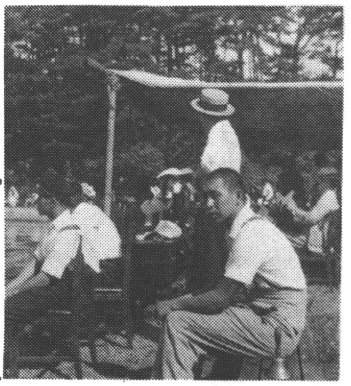
第11回全国学生水上競技大会
9月23日・24日・25日
第1日
400米自由型予選
D組笠原泰三が出場予定が棄権している。
100米自由型予選
A組森清、B組河村秀利、D組長輿謙二出場予定が

夫れも棄権している。
100米平泳予選
B組中村徹雄、C組河野貞三が出場しているが落選している。
50米背泳予選
B組深水正朝、C組鈴木勝太郎、D組内丸正三が出場深水は3着39″4、鈴木は3着37″6で入選し内丸は棄権している。
800米自由型予選
B組に笠原泰三が出場予定が棄権している。
50米自由型予選
B組に波多野雄二郎、C組に寺中廉、D組長與謙二、E組に河村秀利が出場になっているが寺中と河村は落選し波多野と長與は棄権している。
200米自由型予選
A組森清、D組笠原泰三が出場予定になっており森は落選し笠原は棄権している。
第2日
200米リレー予選、200米平泳予選は棄権している様に思われる。
100米背泳予選
A組内丸正三、B組深水正朝、C組鈴木勝太郎が出場し鈴木は2着1′24″2で入選し深水は落選、内丸は棄権している。
50米背泳準決勝
B組に鈴木勝太郎、深水正朝が出場しているがいづれも落選している。
100米背泳準決勝
B組に鈴木勝太郎が出場しているが惜しくもやぶれている。
以上のように誰一人決勝に残れず、又棄権が多いのは何か理由があったのでないかと思う。

昭和8年

今年度の陣容
監督コーチ　中村徹雄
マネヂャー　寺中　廉、館野栄一
主将　鈴木勝太郎
部員　鈴木勝太郎、姉歯仁郎、内丸正三、寺中廉、河野貞三、河村秀利、波多野雄二郎、森清、酒巻敏雄、長与三郎、吉沢正利

今年も7月第6回全国高等学校水上競技大会東部予選が行われたが記録がない。この年より、全国高等学校のポロの大会が開始され、成城は一高と共に関東代表となり全国大会出場決勝で一高に敗れた。
7月16日～29日迄興津守谷に於て興津夏期水泳学校が行われた。


手前が鈴木勝太郎

コーチ・鈴木忠夫、河野貞二、助手・酒巻敏雄、古家義男、引率者・小野先生、内田先生、園井先生、斎藤先生

7月16日　午前8時20分両国発で酒巻、古家と共に先発隊として出発。興津に着き備品の整理、各方面との仕事の打合せ。海岸のよしず張り、障子張り、部屋の掃除をなす。
7月17日　午前中樽を浮かしたり、帽子の手入れをなす。正午頃内田、小野、園井先生に引率され一行38名来る。午后進級試験をなす。夜おそくまで元気でさわいでいる内にくたびれ静かになることだろう。
7月18日　午前進級発表。3級は深水正保、高井俊篤、仮3級鈴木二郎、神田己季男、4級3名、5級1名、仮5級13名、級外9名であった。
午前午后水泳練習、今年の一年は素質が悪い。
7月20日　午后進級試験を行う。夜防空演習のため消燈をする。この時こわい話をする。
7月21日　午前1哩の遠泳を行う波少しあったが皆よく泳ぐ、落伍者4名。
午后昨日成績不良なるもの再び進級試験を行う。仮1級那須明、2級山口宗樹、鈴木二郎、永野錠二、3級神田己季男、鈴木三郎、仮3級粕川乙彦、4級2名、仮4級10名、5級4名、仮5級9名であった。
7月26日　午前中雨で寒いため、水泳を中止し、インドアボールをする。午后鈴木三郎の進級試験をする。
7月29日　今日は最後の日である。午前練習し午后片づけをして午后4時12分で帰京する。

全日本水上競技関東予選水球に出場しているが記録がない。
9月9日・10日
第1回関東7年制高校水上競技大会
（於　東京高校プール）

7年制高校の内成城・東京・府立・武蔵の4校で第1回水上競技大会が東京高校プールで実施された。

300米メドレーリレー決勝

尋常科

1着	東京	4′11″6
2着	武蔵	4′24″0
3着	成城（那須・柴田・竹尾）	4′28″0

高等科

1着	成城（鈴木(勝)・河野・森）	4′10″6
2着	武蔵	4′17″6
3着	東京	4′23″8

200米リレー決勝

尋常科

1着	成城（那須・柴田・清水・竹尾）	2′13″6
2着	東京	2′16″6
3着	武蔵	2′18″8

高等科

1着	成城（鈴木・波多野・河村・森）	2′3″4
2着	東京	2′7″4
3着	府立	2′9″4

400米自由型決勝

尋常科

1着	鈴木二郎（成城）	6′23″6
2着	鈴木正士（東京）	6′34″6
3着	高橋俊夫（東京）	6′37″4

高等科

1着	佐々木皎（武蔵）	6′3″0
2着	南川幸次郎（武蔵）	6′21″6
3着	栗崎　達（東京）	6′27″4

100米自由型決勝

尋常科

1着	竹尾快助（成城）	1′12″0
2着	那須　明（成城）	1′15″6
3着	高橋武弘（東京）	1′16″4

高等科

1着	森　　清（成城）	1′9″6
2着	岩松慎太郎（武蔵）	1′12″4
3着	平田義温（東京）	1′12″8
4着	波多野雄二郎（成城）	
6着	河村秀利（成城）	

200米胸泳決勝

尋常科

1着	秋山健二（東京）	3′19″8
2着	柴田正和（成城）	3′21″8
3着	高木四郎（府立）	3′29″4
4着	伊藤泰二（成城）	

高等科

1着	佐藤光之助（府立）	3′10″2
2着	秋山新一（東京）	3′17″6
3着	太地典常（東京）	3′17″6

200米自由型決勝

尋常科

1着	鈴木二郎（成城）	2′53″2
2着	川田　稔（武蔵）	2′55″8
3着	高橋俊夫（東京）	2′59″6

高等科

1着	佐々木　皎（武蔵）	2′44″0
2着	森　　清（成城）	2′45″0
3着	田中　実（東京）	2′53″0
6着	波多野雄二郎（成城）	

100米背泳決勝

尋常科

1着	鈴木正士（東京）	1′24″0
2着	湯原仁夫（武蔵）	1′33″4
3着	吉野利夫（東京）	1′41″8

高等科

1着	鈴木勝太郎（成城）	1′23″0
2着	岩松慎太郎（武蔵）	1′31″8
3着	河村秀利（成城）	1′32″6

800米リレー決勝

尋常科

1着	成城（竹尾・森・山口・鈴木）	12′4″4
2着	東京（高橋・鈴木・増野・鈴木）	12′12″0
3着	府立	12′47″4

高等科

1着	東京（栗崎・大宰・平田・田中）
2着	成城（鈴木・河村・波多野・森）
3着	府立（鷲山・衣野・岩田・横田）

尋常科は措しくも優勝をいっしたが高等科は優勝した。

9月15日～17日

第12回全国学生水上競技大会

第1日

400米自由型予選A組に吉沢正利が出場したが落選した。

100米自由型予選A組に森清が出場し入選したが準

決勝で落選している。

100米平泳予選にE組に河野貞三が出場しているが落選している。

50米背泳予選B組に内丸正三、C組に鈴木勝太郎が出場したが夫々落選した。

50米自由型予選A組に河村秀利、B組に森清、F組に波多野雄二郎が出場し森清は入選し、他は落選した。

200米自由型予選D組に吉澤正利が出場したが落選した。

第2日

200米リレー予選A組に出場したが3位までに入れず落選した。

200米平泳予選E組に河野貞三が出場したが落選した。

100米背泳予選C組に鈴木勝太郎が出場し入選せり。

50米自由型準決勝B組に森清出場したが措しくも落選せり。

100米背泳準決勝に鈴木勝太郎出場せるも措しくも落選せり。

800米リレー予選B組に出場せるも4等迄に入ることが出来ず落選する。

今年は遂に決勝迄残れなかった。

12月20日　水泳部忘年会に僕も出席、先生は高松先生だけだった、今年もこれで終る。

昭和9年

水泳部陣容

水泳部長　高松三二

監督コーチ　鈴木勝太郎

マネヂャー　館野栄一

主将　森　清

部員　河村秀利、館野栄一、波多野雄二郎、森清、酒巻敏雄（中西）、長與三郎、大西真博、那須一彌、中村俊平、守田譲二

7月中旬第7回全国高等学校水上競技大会東部予選が行われたが記録がない。

興津夏期水泳学校が7月15日～28日興津守谷海岸に於て開催された。

コーチ・鈴木忠夫、河野貞二、助手・大西真博、山口宗樹、深水正朝、引率者・深瀬先生、楢崎先生、高松先生、内田先生

7月15日　小雨　午前8時13分にて山口、深水、那須、両国を出発、大原にて鈴木（忠）、河野と合流し先発隊として興津へ向う。

小雨の中準備をととのえる。

7月16日　雨　天候悪く寒し、正午頃小野、深瀬、楢崎の諸先生をはじめ一行58名興津着、直ちに部屋割りをきめる。午后雨のため水泳せず一行元気おびただしい。

7月17日　曇　午前中水温低きため各部屋別インドアーボールをする、本部優勝。午后進級試験をする。

7月18日　雨　雨がひどく降っているため午前水泳は中止、午前中進級会議。午后発表。雨のため午后も練習を休む夕方から雨がやむ。

7月19日　晴　久し振り晴天、午前一重伸・二重伸を4級に横泳・平泳を5級に級外に面かぶりを教える。

午后も水泳練習。深瀬先生帰京さる。

7月20日　雨時々晴　海荒れて泳げず、午前中インドアーの練習をする。午后寄宿舎の前で一時間ばかり水泳練習をする。4級に早抜手浮身を教える。

7月21日　曇時々晴　午前中進級試験をする。4級に潜水立泳を教える。午后より遠泳を行う。水冷たく相当うねりがあった。船にあがった者6名、成功者36名であった。2時半出発。市中側に到着したのが3時26分であった。

7月22日　曇時々晴　午前水泳練習、午后遊泳大会を開く。そのあと進級発表をする。樽廻りリレー、仮5級リレー宝探し、桃とりなどをする。午后12分で楢崎先生他17名帰京。正午頃石井、出口、楠目、永田、高松先生達来られた。

7月23日　晴　午前中3級に片抜手一重伸・片抜手二重伸・手操伸・抜手伸を4級に一重伸・二重伸を説明する。午后も水泳練習。

7月24日　曇　午前中水泳練習。昨日に引続いて教え、午后各自に泳がせてなおす。夜試胆会をする。内田先生、小野先生の怪談の後夫々指定のところへ自分の名札をもって行かせた。皆恐がっていた。終り頃雨が降り出して来た。

7月25日　雨　朝から雨なので水泳練習は取りやめ、勉学の後、内田先生の学術講演があった。午后雨がやんだが、水温が低いので水泳はとりやめインドアボールの試合をする。本部優勝する。

7月26日　雨　午前中雨のため水泳練習を休む。午后水泳練習をするも水冷たく練習困難を感じた。

7月27日　曇時々晴　午前中進級試験をする。終って渡り島へ採集に出かける。午后3哩遠泳を行う。天候悪く、波は高くないが三角波がたち、水温低いため足をつる者多く13名船にあがり又入水したものも多く、全部泳いだのは12名である。出発時間2時27分、到着時間4時13分であった。遠泳到着の時銅直先生が来られた。
夜は茶話会をする。

7月28日　曇后晴　天気久し振りによし。午前中樽廻リレーや西瓜取りをする。午后自由練習とし午后4時12分で帰京する。

第2回関東7年制高校水上競技大会

9月8日・9日

今回は成城プールで開催されることになったので審判長をおおせつかった。

第1日

300米メドレーリレー決勝

高等科

1着	武蔵（佐々木・安東・常松）	4′13″2
2着	府立（岸田・河原・横田）	4′14″0
3着	成城（河村・村上・波多野）	4′15″8

尋常科

1着	東京（鈴木・福山・増野）	4′15″4
2着	成城（山口・柴田・竹尾）	4′19″6
3着	武蔵（湯原・石黒・藤村）	4′24″2

第2日

200米リレー決勝

高等科

1着	武蔵（常松・奥名・佐々木・安東）	2′4″8
2着	東京（大寧・手島・栗崎・高橋）	2′5″4
3着	成城（那須・大野・河村・波多野）	2′8″2

尋常科

1着	成城（松本・神田・柴田・竹尾）	2′9″8
2着	東京（増野・佐々田・高橋・鈴木）	2′12″6
3着	武蔵（藤村・日下・石黒・永井）	2′14″4

400米自由型決勝

高等科

1着	佐々木皎（武）	6′9″0
2着	岸田正二（府）	6′20″8
3着	中村俊平（成）	6′35″2

尋常科

1着	増野恒夫（東）	6′16″8
2着	山口宗樹（成）	6′17″0
3着	鈴木正士（東）	6′17″8

100米自由型決勝

高等科

1着	高橋武弘（東）	1′13″0
2着	常松之典（武）	1′13″2
3着	大宰正道（東）	1′14″2
4着	波多野雄二郎（成）	

尋常科

1着	竹尾快助（成）	1′7″8
2着	伊丹康夫（府）	1′14″8
3着	藤村弘毅（武）	1′19″6
4着	神田己季男（成）	

200米平泳決勝

高等科

1着	秋山健二（東）	3′14″0
2着	安東宏喬（武）	3′15″0
3着	河原　一（府）	3′16″4

尋常科

1着	諸橋又蔵（東）	3′25″2

2着　塩谷　晋（府）　3′27″8
3着　高木四郎（府）　3′29″4
6着　柴田正和（成）

200米自由型決勝
高等科
1着　佐々木皎（武）　2′44″6
2着　中村俊平（成）　2′57″0
3着　栗崎　達（東）　2′57″2
6着　大西真博（成）

800米リレー決勝
高等科
1着　武蔵（佐々木・常松・川本・安東）　11′57″6
2着　府立（広部・横田・佐藤・岸田）　12′15″0
3着　成城（中村・大西・波多野・大野）　12′19″0
尋常科
1着　成城（山口・神田・森・竹尾）　12′10″2
2着　東京（鈴木・古賀・高橋・増野）　12′25″8
3着　府立（石渡・岡田・玉川・伊丹）　13′15″4

以上で終り銅直校長より高等科は武蔵高校、尋常科は東京高校に優勝盃の授与があった。尚7年制高校のポロのリーグ戦は昨年につづいて成城が優勝せり。

9月13日　第4回水上運動会が開催されたが詳しい記録はない。

9月14日～16日　第13回全国学生水上競技大会　2部加盟校として出場せるも決勝に残れるものなく涙をのむ。

昭和10年

水泳部陣容
水泳部長　高松三二先生
主将　大西真博
部員　高等科
大西真博、中村俊平、守田譲二、村上静雄、那須一彌、那須明、山口宗樹、神田己季男、深水正保、柴田正和、伊藤泰二、入部辰市、泉康順、竹村貞雄
尋常科
竹尾快助、森美秀、小沢清助、田島復、栗原信治、賀川純基、君塚英男、丹沢章浩、伊藤己之吉、吉本健夫、折居延高、宇津木忠夫、大塚清二、下河辺誠、山口八郎

5月29日～6月4日　第10回全国学生水球リーグ。成城高校は第2部として出場せり。

5月29日　一高9 { 4－0 / 5－0 } 0成城
成城のメンバーＬＦ中村俊平、ＣＦ村上静雄、ＲＦ大野健二、ＨＢ大西真博、ＬＢ守田譲二、ＲＢ山口宗樹、ＧＫ平岡邦允であった。

5月30日　東京5 { 1－0 / 4－4 } 4成城
ＬＦ守田譲二、ＣＦ大野健二、ＲＦ中村俊平、ＨＢ大西真博、ＬＢ入部辰市、ＲＢ山口宗樹、ＧＫ平岡邦允。

6月1日　法大5 { 3－0 / 2－1 } 1成城
ＬＦ守田、ＣＦ大野、ＲＦ山口、ＨＢ大西、ＬＢ中村、ＲＢ村上、ＧＫ平岡。

6月2日　拓大5 { 1－1 / 4－0 } 1成城
メンバーは法大の時と同じ。

6月4日　成城3 { 1－1 / 2－0 } 1中大
ＬＦ守田、ＣＦ山口、ＲＦ大野、ＨＢ大西、ＬＢ中村、ＲＢ深水、ＧＫ平岡。この結果1位一高、2位法大、3位拓大、4位東高、5位成城、6位中央の順位となった。

7月25日～27日
第8回全国高等学校水上競技東部予選大会
第2日　成城は決勝に200米リレー、800米リレーと山口宗樹が800米自由型決勝に出場したが入賞出来なかった。
第3日　水球の試合が行われ成城高校は北大予科と戦った。

7月16日～25日
興津夏季水泳学校
附添先生　小宮、小薗、林、小野、仲原の諸先生
コーチ　鈴木忠夫、河野貞二　助手　寺中、中西

7月15日　先発隊として河野、寺中、中西、深水と興津に出発する。波高く風強いが準備を終える。

7月16日　正午頃一行50名興津に到着。今日は小雨が降り、非常に寒いので、進級試験はとりやめる。

7月19日　午前インドアボールをする本部優勝する。午后櫓廻りをする。そのあと水泳練習をする。夜は試魂会を行う。から元気にかんしゃく玉をバチバチ言わせてゆく者もいて仲々面白かった。

7月20日　午前中寒いが水泳練習をする。午后1哩遠泳をする。2時20分出発し3時25分にあがる。33名中11名船にあがったが、もう少しで完泳出来たのにと思う者5名いた。

7月22日　午前中鯛の浦へゆく。小宮先生来られる。午前11時より水泳練習をする。午后も水泳練習をす

る。

7月23日　午前中進級試験を行う。山口八郎仮1級となる。午后3哩遠泳を興津海岸より守谷海岸まで行う。22名の内5名落伍他は全員泳ぎきる。所要時間2時間2分であった。

7月24日　午后遊泳大会を行う。競泳や宝さがし、桃とりなど楽しくすごし、夜は茶話会でしめくくる。

9月7日・8日

第3回関東7年制高校水上競技大会

（於　府立高校プール）

300米メドレーリレー決勝

尋常科

1着	府立（石渡・高木・天野）	4′10″6
2着	成城（竹尾・守田・森）	4′14″4
3着	東京（白土・諸橋・増野）	4′16″8

高等科

1着	府立（鈴木・秋山・渡辺）	3′57″6
2着	東京（福島・川原・伊丹）	4′11″4
3着	成城（大西・那須・中村）	4′12″4

200米リレー決勝

尋常科

1着	府立（天野・伊藤・川田）	2′10″8
2着	東京（増野・咲山・佐々田・秋山）	2′13″8
3着	成城（大場・山口・守田・森）	2′18″8

高等科

1着	東京（渡辺・鈴木・高橋・高橋）	2′ 4″4
2着	府立（小坂・丹沢・桜田・伊丹）	2′ 7″6
3着	成城（松本・那須・神田・中村）	2′10″3

400米自由型決勝

尋常科

1着	増野恒夫（東）	5′37″4
2着	米本礼太郎（府）	6′ 1″4
3着	古賀郁之介（東）	6′ 2″2
6着	森　美秀（成）	

高等科

1着	鈴木正士（東）	5′45″6
2着	横田正五（府）	6′ 0″0
3着	伊丹康夫（府）	6′ 6″8
5着	山口宗樹（成）	
7着	大西真博（成）	

100米自由型決勝

尋常科

1着	竹尾快助（成）	1′ 6″4
2着	藤村弘毅（武）	1′12″6

高等科

1着	渡辺藤男（東）	1′10″6
2着	中村俊平（成）	1′11″0
3着	高橋俊雄（東）	1′11″6
6着	神田己季男（成）	

200米平泳決勝

尋常科

1着	諸橋又三（東）	3′15″8
2着	山田淳二（武）	3′19″0
3着	高木四郎（府）	3′20″0

高等科

1着	河原　一（府）	3′10″4
2着	秋山健二（東）	3′12″6
3着	塩谷　晋（府）	3′14″6

200米自由型決勝

尋常科

1着	増野恒夫（東）	2′39″7
2着	米本禮太郎（府）	2′46″8
3着	天野公義（府）	2′48″0
5着	森　美秀（成）	

高等科

1着	鈴木正士（東）	2′41″6
2着	川田　稔（武）	2′44″4
3着	渡辺藤雄（東）	2′47″8
4着	中村俊平（成）	

100米背泳決勝

尋常科

1着	石渡良一（府）	1′23″4
2着	竹尾快助（成）	1′28″4
3着	中川正夫（府）	1′29″0

高等科

1着	大西真博（成）	1′28″2
4着	大野健二（成）	1′30″9

800米リレー決勝

尋常科

1着	府立（天野・田中・石渡・米本）	11′49″0
2着	東京（増野・白土・秋山・古賀）	12′ 2″0
3着	成城（森・守田・山口・竹尾）	12′ 4″8

高等科

1着	東京（鈴木・高橋・高橋・渡辺）	11′36″0
2着	府立（伊丹・桜田・横田・岡田）	11′37″0
3着	武蔵（永井・川本・奥名・川田）	11′42″4
4着	成城（山口・大西・神田・中村）	

7年制高校ポロの試合は

成城対武蔵は7：2で成城勝つ。

成城対東京は8：2で成城勝つ。

成城対府立は9：1で成城勝つ。

これで3年連続優勝した。

9月14日

第5回水上運動会

会長銅長先生、副会長に小出、高松先生をお願いし、審判長を僕がやることになった。各種競技の他水球の模範試合、小学生25米レース、職員の対抗レースなどあり盛況であった。

9月中旬すぎ第14回全国学生水上競技大会があり2部として出場したが記録がない。

感じたことども

旧制高等学校教諭　小野嘉寿男

そ　の　1

今年のインターハイでは、部員一同の奮戦力闘が結実して、東部代表の一として京都の大会に出場するの栄を得た。

僕は公用のため附添って行かれなかったので、臼井先生にお願いして京都に行っていたゞいた。試合すんで、先生が東京に帰られてのお話に、「京都での部員一同の生活は、竹尾を中心にして実に良くまとまり、秩序と規律ある立派なものであった。遠征で今度の様なのは始てゞあった。」と賞讃していられた。

僕はどうぞ今後ともこの良い態度を部員一同が受けついで行かれる様希望して止まない。

そ　の　2

先輩鈴木（勝）・波多野両氏の入営壮行会の席上のことであった。嘗て尋常科時代水泳をやっていたが、高等科になってからは他の部の方でなくてはならぬ人物とて水泳部とは直接部員としての関係はなくなっていた大場が、その席に列っていた。テーブルスピーチに入ってから、大場は立ち上って次の様に述べた。

「……自分はかねがね見聞していたが、水泳部のこういう会合が、上品に和気藹々と一家族の集りのやうに行われているのは美しい。

自分は水泳部員ではないが、こういう会合の空気が好きなのだ……。」

僕は、この言葉が他の人の口から出たのであったなら、容易に真なりとして受けとれなかったであろうが、嘘とか世辞とかは微塵も持合せてない大場一純真な大場が云ったゞけに、とても僕は嬉しかった。

僕は、もう一度、今後ともこの家族的な親しい友情と気品ある元気さが部員一同の中に、生々と伝わって行く様希望して止まない。

そ　の　3

以上の二つにも増して、僕が心からの喜びを以て感謝していることは、先輩一同の熱誠なる指導後援と、溢るゝばかりの現役部員に対する兄としての愛情である。

思へば、今夏始めて、待望久しかりしインターハイに於ける勝利も、これ一に先輩の恩威並び行われるコーチの賜である。

僕等現役一同は、これに対して、筆舌に現わし尽せない感激を感じている。そして同時に、この恩義に報ゆる道を覚悟しないわけにはゆかない。

それは、今こゝに述べる必要はない。僕等の心の中に、深く堅く誓っていることに違いないから。

そ の 4

改めて、僕は水泳部現役一同に代って、先輩各位の御健在をお祈りすると共に、今後とも、更に更に僕達を御指導下さる様祈って止まない。

旧高第4回（S7卒）
臼井　誠　　自画像

浩然荘縁起

旧制高等学校教諭
元水泳部顧門
森　源太郎

私が成城に着任した年の夏、即ち昭和3年の夏、私は尋常科の付添として興津の水泳に派遣された。何でもその前年も興津だったが前々年は静岡県の静浦へ行ったのだそうだ。その年は尋常科一・二年を中心に高等科二年までを加えて総勢四・五十名で賑やかに興津に繰り出したのだが、行ってみてその宿舎や設備に驚いた。

一部十数名の生徒は、その前年同様、父兄の森轟昶氏の本宅に御厄介になることになっていたからよいが、あとの三十余名は、土地の板前林某の留守している或る村医の旧宅とその隣家の物置の中二階に分宿するのであった。小さい明り窓しかない物置の中二階はいうまでもなく、村医の旧宅の方も田舎風の建物で、柱や框の用材は太くて美事であるが、中廊下のない、田の字形に八畳二間六畳二間の並ぶ間取りで、その一つの六畳は板前老夫婦と手伝い男の部屋、残りの三間二十二畳が我々三十名に宛てられたのだった。

襖を外した敷居の上にトランクやカバンを並べ、鴨居へ洋服やタオルをぶら下げると、それらが四室の境界になり、台所も玄関も土間で、大切な風呂場もないので、濡縁の端に小さい据風呂を一つ据えて、部屋との境に簀子の簾を一枚吊しただけだった。

翌4年の夏には、また参加者が増えたので、物置のある家とは反対側の住宅を一軒そっくり借りることにしたが、それがまた鉄道工夫とかの安普請のまだ荒壁のまま、迂濶に口でも開けて寝たら壁土と一緒に鼠の糞の一つ位は必ず落ちて来るというひどいものだった。桐組のE君が日射を受けて発熱し三日間この家で病臥していたのを思い出すと今でも辛い気持になる。

こんな工合で、初期の興津の宿舎は全く「かくてもあられけるよ。」であったが、生徒は大して不足も言はず愉快に十余日のカレンダーを剝いでいった。

ところがこの両年の間の幾日目かの晩、一年生のM君が夜中に小便に起きて、寝呆けたまま宿舎のすぐ下の鉄道線路に下りて、レールに耳を当てて汽車の遠鳴りを聞いているのが発見され、又幾日目かの夜には松組のN君が同じレールの傍で「お母さん」と言って泣いているのが発見されて大騒ぎとなり、M君などはその年の助手落合君に、柱に結んだ長い兵子帯に継がれて寝たという事件が起こった。

水泳宿舎の建設の要望が高まって来たのはこういう状態だったからだ。

たぶん昭和5年の春だった。校内にプールを作ることが決定した時、尋常科主事の仲原先生の発言によって、併せて水泳宿舎も作ることになった。或日突然我々は小原圀芳校長に呼び出され、「水泳宿舎を作るから、直ぐ土地を選定しろ。」と命ぜられた。我々は勿論嬉しかったが、余りの急に大いに面喰った。でもすぐ時の高等科水泳部の高松先生と私とが、興津守谷に勝る水泳地もがなと、近県の海岸視察に出掛けることになった。出発に先立ち先づその位置、交通機関と海岸の状態と環境の適否等の四条件を以て評価を決めることとし、伊豆東海岸、三浦半島、房総半島のうち、未見の伊豆東海岸と三浦半島の一部を見ることにした。

陸地測量部の地図等を用意し、大きな期待を以て先ず伊東へ行って川奈の岬を見てみた。そこは岩石

磊々たる入江で水深も大部分淵をなしていて全く水泳場には不適の所であった。川奈の先の日蓮岬にも一縷の望みをかけていたが、そこは潮流が悪く毎年溺死者を出していると聞いて落胆した。夜に入って伊東に戻って一泊し、翌日早朝葉山へ出て、そこからバスで初声の手前で下車し附近の海岸を見た。その海岸は恰度房総の館山湾のように遠浅の広い浜であったが、泥と貝殻交りの砂がいかにも不潔で二、三町沖まで一面に海藻が生えているのだった。

こう見て来ると、我々の頭にある、沼津の桃郷、静浦、大瀬崎、戸田、白浜、稲取、伊東、油壺、三崎、浦賀水道、木更津、館山、布良、房総の白浜、小湊等の候補地と共に、結局、最初に考えた四条件による採点で、興津の守谷海岸に勝る所はないという結論に達したので、そう報告し、興津海岸と決定したのだった。興津と決定してからも、鵜原がいいか茂浦がいいか又は守谷がいいかが問題となり、森

祀さんの所では、茂浦をしきりに薦められ、海中の岩は火薬で取り除けばよい、通路は隧道を穿てば出来る等の助言を寄せられたが、費用関係から最後に、現在の守谷海岸に決定せられたのである。

守谷と決定したのは6月末であったが、工事を引受けた高尾工務店では一か月の間に、岩を削り、土留めを築き、埋め立てをし、現在の宿舎三棟を建ててくれたので、未だ壁も乾き上らないのに、その7月から使用し始めたのだった。

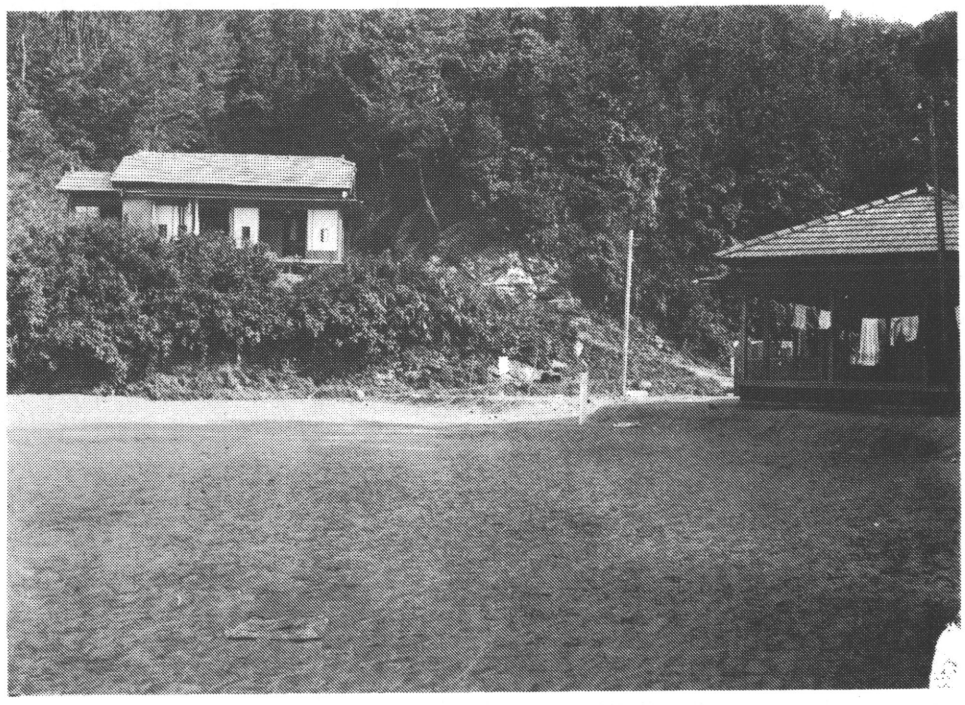
こうして興津守谷の水泳学校は内容、設備共に一応の完成を見たのである。昭和10年に至って、小野先生の尽力により、森さんの寄附を頂いて大修理を施し、現校長銅直先生の命名による浩然荘の名を得て、漸く成城水泳部の海の聖地としての面目を整えたのである。

近来我が水泳部が益々人材を集め、実力を発揮して来たのは誠に賀すべきであるが、此に加え伝統的な暖々たる和気に包まれた部の活動は立派である。それにつけても連年興津の世話をして下さった野沢先生兄弟、鈴木忠夫氏、中西敏雄氏、大西真博氏、寺中廉氏達の先輩諸兄の御尽力に御礼を述べなければならぬ。その時々の興津水泳学校の生活については色々の思い出もあるが、今回は浩然荘縁起の一節だけに止めさせて頂こう。（昭和13・12・2）

＜追記＞

◇上の浩然荘縁起は、私が昭和13年、成城水泳部誌に寄せた旧稿を、保管しておられた鈴木忠夫氏から借りて読み返えし、旧稿の仮名遣を現代風に改め、その序でに二、三個所字句を訂正したものである。興津水泳学校付添コーチ陣一覧表は、鈴木忠夫氏の克明なメモを写して表としたものである。コーチ、助手の名の中にはもう再び会うことのない戦死者の名も見え、追惜の念の湧くのを禁じ得なかった。

◇興津の水泳学校の成功は、海碧く砂白い海岸の環境もさりながら、鈴木忠夫氏を中核とする有能なコーチスタッフの親身な後輩指導の賜ものであったと思う。それに土地の素封家森祀氏一家の暖い御援助も忘れられない。ここを借りて深甚な感謝を捧げさせて頂こうと思う。（昭和58年6月8日記）



水泳部前記

旧制高等学校教諭　内田昇三

私が生れたのは神田であるが、四つのときから、三浦半島の先端の三崎の城ケ島というところで育ち、小学校も三崎の小学校を卒業したので、小さいときから、漁師の子供のように海に潜って、サザエをとったり、イセエビをついたりして暮した。当時はまだ明治なので、海水浴というものも珍らしい時代である。たまに夏になると避暑客が来て、泳いで行くのであるが、村の人達は、陸者は、海へ来て、海の上をたゞボチャボチャ泳いであれで面白いのかのうといっていた。我々も海というものは、表面は空気で区切られているが、深い海水の世界で、そこにこそ魚もいるし海藻もあるので、それを、海の中をみずに、たゞ泳ぐだけでは、海へ来た効がないではないかと思っていた。小学校を出てからは、中学、高等学校、大学（すべて旧制）とみな東京で過したのであるが、夏には必らず島にもどって、漁師と同じような生活を兄と二人でしていた。そのため、いわゆる水泳というものを正式に習ったことはなく、また学生時代水泳部というものにはいって泳ごうという気は全然なかった。

ちょうど、開成中学の5年の5月に（旧制の中学は5年制で、私の翌年からは、4年からでも進学出来るようになったが）、極東オリンピックが、東京の芝浦に、開催された。同級生に、井上益雄というのがいて、その父親が井上準之助といって、当時大蔵省の高官だったので、オリンピックのフリーパスをもっていて、それで二人であちこちみて歩いたことがある。大正6年（1917年）である。そのとき、プールは海水をそのまゝ引き入れたものであったが、フリースタイルで競泳があったとき、フィリピンの選手はもちろんクロールだったが、日本の選手は、日本泳法の片手抜き（水府流）であった。そして、日本が勝ったことを覚えている。

その位、まだ西洋式の競泳というものは一般化していなかった。後年成城で50米プールを作ったとき、プールを持っていない慶応の選手が、プールを貸りに来たことがあった。オリンピックへ出た北村たちであった。

それでともかく、水泳部があっても、水泳を教えることは出来ず、従って、成城でも、水泳部が出来ても、部としては、関係がうすかった。

たゞ海が好きだったので、守谷の海岸に森さんの御好意で浩然荘という家などが作られてからは、毎夏女学校の生徒についていったり、また男の学生や家族をつれてもいったものである。鈴木忠夫君などと親しくなったのも、教室ではなく、興津の浜である。

それでも、プールで大会などあると、先生たちのリレーか何かに一役をかったが、そのときにも、自己流の泳ぎで泳いだのである。

そういうわけで、成城の水泳部には、何のお役にも立たないでしまったが、成城をやめてから、東京女子医大につとめるようになったとき、学生の有志がつくった房州の岩井での水泳の会に顔を出し、それがあとになって、　学友の水泳部に昇格したとき、顧問のようなことをし、70才で停年退職をするまで、それが続き、退職後も、名誉部員として、いまだに、合宿などにもついていって、およいでいる。この春も、伊豆の湯ケ島の落合楼の温泉プールでの春の合宿があったので、一緒に泳いで来た。

正式な泳ぎでなくても、水泳というものは、一生出来るよい運動である。体にどんな障害が起ろうと、水泳だけは医学的に奨励されているし、私も当年82であるが、いくら年をとっても出来るスポーツである。

成城の人たちも、勝敗にこだわらず、うまいまずいにかまわず、泳いで欲しいと思っています。

側面50年史

成城大学名誉教授
臼井　毅

水泳部50年史の上梓がきまり、何か書くようにとお誘いを頂いた。私の在学中はまだ水泳部はなかったと思う。たしか夏には沼津近辺の静浦で海の学校が開かれていたようで、私と同期の阿部光寛や藤田正秀たちが関係していたように記憶する。

成城学園の年表を繰ると、プールの完成は昭和5年8月20日、プール開きは9月13日となっている。それは私が卒業した後のことであるが、プール開きの日のことは今でもはっきり覚えている。プールがあるといいなあ、これはしょっちゅう誰もが考えていたことである。私の在学中、授業に小原先生とフリー・トーキングが出来る時間が設けられていた。ある時、「ウス、プールはどれ位の大きさのがよいのか」と仰しゃるので、「50米」とお答えした。「どうせなら、もっとウンと大きいのではどうだ」ということであった。先生は何にも御存知なかったのだ。当時、東京、いや全国に50米の長小路プールは一つしかなかった筈だ。現在はどうなっているかはっきりは知らないが、二子玉川に50米のがあった。渋谷から玉電（今はもう走っていない）に揺られてバスター・クラブ、ワイズミューラー、アルネ・ボルグ、高石勝男、鶴田義行の泳ぐのを見に行った、あのなつかしい玉川プールがそれである。神宮プール（国電沿いの屋外プール）は昭和5年5月、極東選手権（今のアジア大会）に間に合うように出来上ったもの。話をもとに戻す一実は小原先生は広々とした水面を、御自身甲冑に身を固め、大抜手を切りたいと思っていらしたーこれは私が直接先生から伺ったことだ。

水泳部の起源を探ろうと思った時、不図私は、後にすっかり水泳部にのめり込んだ私の弟が、昭和5年7月に静岡で合宿し、私が陣中見舞に出向いたことを思い出した。水泳部に三橋達郎君という静中出身者がいたからのことである。行って見ると静中のプールは50米ではあるが、水路の数が少く、短冊を並べたような恰好で、後にも先にもあんなプールにお目にかかったことはない。数日の合宿は誠に充実したもので、帰京すると、神宮プールでのインターハイ関東大会が待ち受けていた。この時に成城高等学校水泳部が発祥ということになるのであろう。出場者は三橋（自由型・背泳）、真野（自由型）、河野（自由型）、臼井（自由型・背泳）、中村（平泳）等で、初参加にしては相当得点し、先ず先ずの首尾だったと思う。

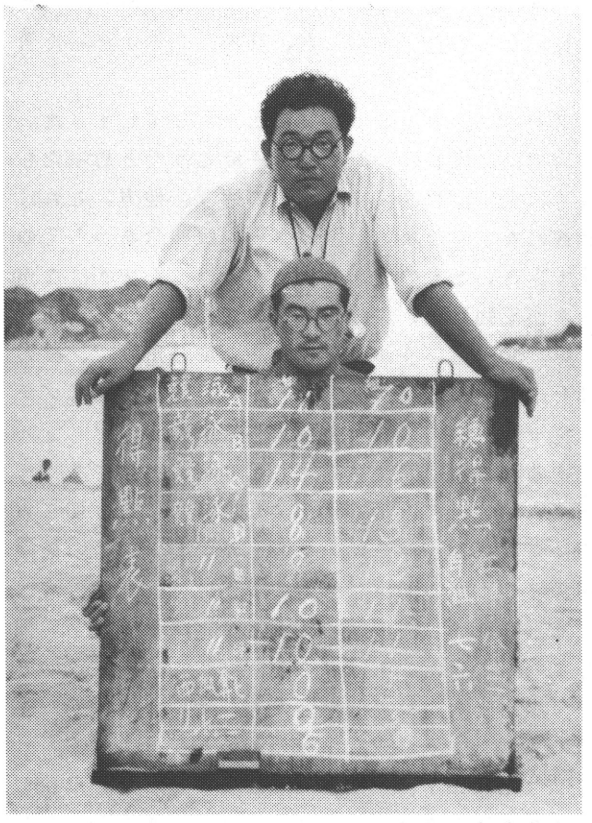
次の年は自分達のプールで思うように練習が出来、陣容も豊かになり、特に臼井は200米自由型で本命の八高小出とわたりあい、高校新記録を出す程。他に平泳の白山が慧星の如くあらわれた。惜しむらくは、伝統のある古いところとちがって、参加僅かに二年目では何事も不便・不利であった。他方、三橋君が植えつけた水球は、参加校は僅かだったらしいが第一回水球インターハイで優勝した。この三橋君は成城から東大農学部に進み、水球の指導者、役員として水泳連盟でも重要な存在であったが、戦事中、応召、殉職（戦死）された。成城水泳部創設の中心人物として永く記憶されるべき人、後に大学の水球が全国征覇を遂げる端緒はすでにここにあったのだ。部長はたしかボーさんこと、高松三二先生だった筈である。

プールは、あっという間に出来上ってしまった。一方では、流石は小原先生、一度こうだと思ったら直ぐに実行に移す、まさにその通り、他方、これは拙速になりかねない。あのプールは残念ながらその見本みたいなものである。工事万端、手抜きはなかったかも知れないが、まるで素人の仕業としか思えない。50米というが、それは底の部分だけで、縦の部分は両方の壁面が開いてしまい、実測は50米プラス何センチ、遂に折角の長水路も公認されずじまいである。給水に関する見通し足りず、水道でなく地下水に頼ったが、すぐ水が涸れ、満水になり切らぬ内に青みどろが浮く始末であった。しかしその後は関係者の不断の配慮、努力のおかげで、不備の点は改められ、すっかり明るくなって本来の機能を発揮しているようだ。やはりあの時期に、あれだけのプールが出来たのは立派だったし、その後幾星霜、多くの逸材を生み、成城水泳の基地となっている。

私は昭和10年、成城に戻り教壇に立った。母校であったこと、クラスの人数が少なかったこと、そし

て私自身スポーツ好きであったこと等から、水泳部の連中とは親しくしたし、尋常科の夏の行事、興津守谷の海の学校には欠かさず行った。昭和13年、竹尾快助率いるチームは一味ちがう何かを持っていた。竹尾君自身は100米と背泳、特に100米は実に強かった。丸太の如き腕をグルグルまわすところは壮観であった。平泳には守田謙三（かまぞう）がいた。当時、平泳はバタで泳いでも蛙で泳いでもよかった。謙三は飛び込むとバタでぐんと出る、ところが200米は泳ぎ切れないので、後半になると追いつかれ、抜かれてしまう、プールサイドで切歯扼腕した。大会直前にメキメキ腕を上げた自由型の浜田収がいた。大会一日目がおわると、得点が分散して、首位は別としてどこが二位になるか見当がつかない。次の日は竹尾、浜田が揃って上位を占め、メドレーリレーで竹尾・守田・浜田と並べたのが図に当り、あれよあれよという中に関東第二位となり、全国大会に出場出来ることとなった。部長の森源太郎さんが是非私に附添って行ってくれといわれ、その気になった。

京都では百万遍アパートに泊り、食事は三度とも外食、近くにいい食堂が見つかり、安い割には美味しく、滋養豊かであった。大会は京大構内の25米プールを使用し、各地区代表の間で戦かわれた。堤さんという京大のボスが、アナウンス、コール、スターターを一手にという前代未聞の運営であった。成城は少人数だったりして、トータルではビリだった短水路のおかげで、竹尾が100米で1分少々だった。これがその年の日本の十傑に入る記録となった。終始、連中と楽しく過し、こういう思わざる添物があったり、いうことなしであった。



興津の水泳大会

戦時中は競泳活動は一切なし。終戦となるや、成城は何事も復興が早かった。水泳は褌一本、水さえあればよかったから、直ぐに作動しはじめた。昭和21年のインターハイでは、成城は各種目に人材が揃い、関東大会に引続き、見事全国制覇を遂げたのである。監督は丹沢章浩、私が成城ではじめて担任をした生徒の一人である。大体選手全員、私が教室でお目にかかっていた。主将は今は亡きブライこと、山田寿一であった。村瀬泰一（かぶ）は水面を這うように進む短距離泳者、福田龍三は最後には200米平泳で日本十傑に入る程の傑物になったが、はじめて興津の夏の学校につれて行った時はかなづちであった。田中義昭に愚猿（ぐえん）という雅号を進呈したのは私である。当初は怨まれたが、後になって感謝された、なかなかの人物であったが、今はすでにこの世にいない。あれこれ思い出すにつれ、なつかしさに胸がふさがる思いである。

愚猿邸での祝勝会、これがまた大変な騒ぎとなった。物資不足の折、飲食物共に十分でない。しかし流石は成城、何とか固形物は集まったが、液体の方は思うようにならない。丹沢と私であちこち歩きまわり、頭を下げて頂いて来た。得体の知れない代物、それに和洋ちゃんぽんだから、直ぐにあちこちで不始末がはじまる。庭に大きな穴を堀り、「ここでやれ！」と指図する。私共二人と山田寿一の三人だけが酔っているいとまがなくて正気であった。

ふり返って考えると、成城高等学校水泳部は、学制改革のとばっちりを受けて、ここで御名御璽となるのであるが、まさに申分のない幕切れであったと思う。

昭和27年8月、東部男子高校選手権水上競技大会が館山プールで行われ、新制高校の水球チームが東京代表で参加した。主将は鰹（もたかん）、全員9

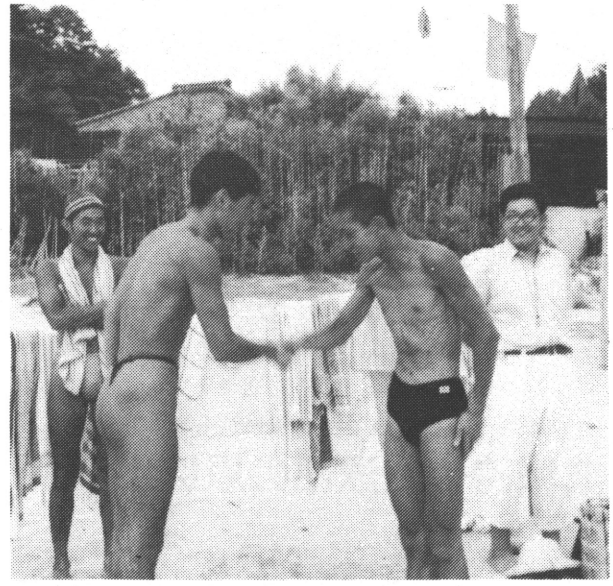
名、私が命ぜられて引率した。過ぎ去ったことを今更愚痴って見ても甲斐ないが、どこの学校も館山の旅館にいるのに、われわれは富浦の富望荘に泊るように学校からいわれてしまった。旅館のような立派な建物ではなく、見すぼらしい朽ちかけた平屋が並び、昼間でも薄暗く裸電球がぶら下っていて、プンとトイレの臭いが充満している。とても大会に参加する選手の泊るようなところではない。放っておけばどんな食事が出るかわからない。そこで主将・主務と相談し献立はこちらで管理することにした。朝は牛乳・卵、夕は上等でなくとも肉か魚を出すことにした。勿論予定外の出費である。選手一同には事情を打明け、毎日の館山プールまでの往復バス代、帰りの旅費は残して、あとは吐き出せと命じた。ありがたいことに一同素直に納得してくれた。

さて肝心の試合であるが、一回戦で学習院を7－0で降し、決勝は神奈川代表慶応高校が相手であった。試合開始当初押し気味の時に機先を制しておけばよかったのだ、何となく調子が整わない中に先取点を許し、4－0で敗れた、スコアの示すような一方的な試合ではなかった。しかし私は球を追いかけ、水中で組んず、ほぐれつ争っている連中を見て、よくこれだけやれるものだと思う中、涙が頬を伝って流れた。晩餐に何かと思ってもそんな余裕はない。しかし一同晴れ晴れと、その晩は泊り合せた中学生相手に試胆会をやって憂さを晴らした。

次の朝、帰りは船がいいという意見が出て、そうときまり、館山の埠頭から東京湾汽船に乗り込んだ。夏の太陽が照りつけ、甲板にいると焦げつくようであったが、船室でお客が口を動かしているのを見るのが切なくてずっと外にいた。何しろ朝、きわめて貧しい食事をしただけなのだ。恐らく誰しも自分だけならどうにかなったのだろうが、人様の分までは無理、じっと我慢するより他なかった。「武士はあいみたがい」といういましめのことばはもっと悠長なときにしかあてはまらない。芝浦が向うに見えて、桟橋まで、何と時間のかかったこと！　私は山本あー坊と励ましあい、慰めあいながらどうやら成城にたどりついたが、胃の腑の中に飯粒が一つもない事態とはどういうものかをいやという程思い知らされた。同じ釜の飯を食った仲間同志なればこそ、あんな目茶なスケジュールがこなせたのだ。

昭和28年、大学に移ると、高校で教えた連中が待ち構えていて早速水泳部長に祭り上げられた。館山の大会に出たメンバーが挙って大学に進み、切磋琢磨、メキメキ頭角をあらわし、関東学生水球リーグ一部の名門に名を連ねる程になっていた。旧制時代からの伝統、自分たちのプール、そして村瀬友三郎という、得難い指導者にめぐり会ったこと、特にこの三番目が一番効いた。「友さん」こと、村瀬友三郎君は有名な水泳一家、村瀬一族、四人の男兄弟の三番目、旧制理工の出で、慶応出身、私とは隣人同志だったこともある。華やいだ競技歴はないが、卓絶した水球の理論を自ら開拓し、この人なりに一家をなし、成城水球に心血を注ぎ、見事成果を挙げた。成城の異常な躍進が世間の耳目をひかぬわけはない。やがて全国の名門校から水球の名選手が集り投ずるようになった。彼等はきびしい入試を突破し、入学後も勤勉な学生であった。これは、その頃の当事者であった私の証言である。どういうわけか京都勢、鴨沂、山城、西京出身者が多かった。桑原和司が先鞭をつけたのではなかったか。全日本級の選手が続続あらわれ、オリンピック選手も生れた。

それや、これや、今や過去の出来事となってしまったが、私は「昔の光、いまいずこ」というような退嬰的な考え方は絶対にしたくない。他のメイジャースポーツにおいても、長い間の名門校が、輩出するセミプロにも等しい新勢力の抬頭に完全に圧倒されて孤影悄然たるものがある。成城も御多分に漏れ



興津にて　紅白試合の結末はジャンケンで

ないが、かっての偉業は偉業として、相対的でなく、絶対の価値として今なお誇るべきであると思う。私の書斉の壁面に円形の白地に真紅でSEIJO WATER POLOと記したペナントが掲げてある。これは大学水球が全国制覇を果したときに選手一同が私に贈ってくれたものである。折に触れ、目を上げて、これを見ると元気が出る。

さて、締め括りをしなければならない。私が部長をしていた終りの頃、昭和30年代の後半、関西出身の部員の尽力で甲南大学と定期戦を組み、はじめは成城に来て頂き、翌年は向うに伺った。その時、プールは小学校の浅い25米のプールであったが、わが方の正岡が珍技を披露して後々までの語り草になったことを覚えている人はいませんか。レースは概して記録もよくなかったが、それでもこちらにはインカレでも十分通用する背泳の広瀬俊之がいた。

標題にもあるとおり、これは正史ではなく側面の見聞を書き記したものに過ぎない。記憶ちがい、思いちがいも多かろうと思う。何卒御叱正頂きたい。多数河童諸君の御好誼のおかげで生涯の友を得た幸せ、何物にもかえ難い。終りに成城水泳の永遠の発展を祈る。

成城時代水泳部の思い出

旧高第3回
S6年卒業　真野国夫

成城に昭和3年に入学し、早速鈴木と仲よくなった。鈴木はたしか新宿の六中からの入学と記憶している。一年生の時クラスの皆で箱根に遊びに行き、その当時小さいプールが箱根にあった（一応は飛込台もあった）ので、そこで鈴木や渡辺（故人）と一緒に泳いだのが最初だったと思う（小生は中学時代、一応水泳部で選手生活ーといっても強い中学ではなかったがー）。ただその時は三橋達郎（以下達ちゃんといわせてもらう）も一緒だったが彼は泳がなかったと記憶する。

二年の時、水泳部（といっても競泳はなかった）で千葉の興津海岸に行った。鈴木、田中（現電気通信大学学長）、長岡など一緒だったと思う。高松先生（その当時から競泳をするようになっても水泳部長）、野沢先生とその弟さん（東大フットボールの名選手であったか、この時、お兄様と一緒に参加）も一緒であった。その頃から競泳をやろうかという話が出て、鈴木の世話になり始めた。淀橋のプール、落合屋内プール（珍らしかった）に練習とはいえないが泳ぎに行った。鈴木、長與、河野、白石などの記憶がある。そうして二年の時、インターハイ（全国高等学校）水泳大会に参加しようということになって、達ちゃんの母校静岡中学で合宿し、練習らしいことをした。参加者は達ちゃん、長與、河野、中村、佐久間、臼井だったと記憶する。

インターハイに出席は、臼井、達ちゃんの活躍が目立った。800米リレーでは小生がブレーキになってしまって今でも申訳ないと思っている。その頃からプールを作って欲しいと鈴木と小原校長先生にお願いにいった。

前列　左から臼井、真野、佐久間、三橋、河野
後列　森先生（水泳部副部長）、中村、長与、鈴木、高松先生（水泳部長）

三年になってようやく出来た。その夏も鈴木などと興津に行った。プールがない時には玉川プール（二子玉川にあった）まで電車で時間をかけ（渋谷廻りで）出かけて練習した。念願のプールが出来て大喜び、東京高等師範（今の教育大）が合宿に来たり、東大とウォータポロの試合をしたりした。写真はその時の選手関係のものである。

後では初めて校内の水泳大会があり、先生方のリレーもあった。人気のあった小出教授（ドイツ語）も泳がれて直角に曲ってしまわれたりして大笑いの楽しいものであった。

昭和6年3月には三橋と鈴木と小生が卒業、三橋

は東大農学部に、鈴木は東京工業大学に、小生は東北大学の電気にそれぞれ進学した。小生は大学に入っても水泳部（といっても北国であまり盛大ではなかった）に関係し、時には明治大学をよんだりしたこともあった。

鈴木とはその後あまり連絡することもなくすっかり御無沙汰してしまっている。

三橋はその後ずっと連絡し、彼が大学卒業してからも、結婚にも（小生は戦地で戦争中だったが）関連を持った。残念ながら、彼は南方へ赴任の途中、潜水艦の攻撃にあって戦死した。船が沈没の時陸が見えたそうで泳いだとのことだったが彼の水泳への自信がわざわいしたのかと残念で仕方がない。本当に惜しいことをした。小生は昭和12年から20年終戦まで軍務にあったが、このとおり一人残されてしまった。しかし達ちゃんの未亡人とは今なお行ききしており、先年小生の入院時にはわざわざ見舞に来てくれたり、その後も電話を時にかけて来てくれる。

その他の人々の消息は残念ながら知らない。

競泳はやらなかったが、当時の中学生だった田中は今電気通信大学の学長で、先月には小生主催の継電器研究会を大学で開催し（年1回会場をお願いしている）、昼食を御馳走になった。

母校の水泳部にもすっかり御無沙汰してしまっている。相当前に一回ポロの試合を見に行ったが、もうすっかり変ってしまっていて今更顔を出すのもどうかと思うが、50周年記念は是非成功して欲しいと祈っている。

長い間、たゆまずの鈴木君の努力本当に感心し、感謝している。

終りに水泳部のますますの発展を祈ってやまない。

遺　稿

旧高第4回
S7年卒業

長与俊一

成城水泳部時代の思い出を何か書く様にとの御達しで、色々考へているうち、段々期日が切迫して遂に最後通牒とまでなって仕舞い、ようやく筆をとったものゝ、何もまとまって書くことがない。且て鈴木忠夫氏が成城文化史に書かれた通りである。私の思い出も、鈴木氏と大して差はないと思っている。以下二、三ちょっとした愉快な思い出を書かせて載きたい。

その一、未だプールが出来ぬ前のことである。プール建設熱が高まって来て、とにかく25米位で安いのを造ろうやと言うわけで、高松先生その他と相談した時、松の木張りにしたらと言う意見が出た。勿論、全部松の木造りである。丁度この時か、渋谷道玄坂に20米位のプールがあって、これが全部トタン張りであった。私は二、三回此処で泳いだことがあり、感じも割合に良いので、相当強硬にトタン張りを主張したことを覚えている。これら、プレーントラスト？により提出されたプール設計案も小原校長の100米四方の大プール案の前には、空しく撤回せざるを得なかったのである。

その二、いよいよ50米プールが出来ることになり、敷地に杭が打たれ縄が丁度プールの大きさに張ってありこの中の土を堀り出すのだと聞かされ、勇躍シャベル片手にとんで行った。既に先陣であり、即ち臼井家の愛犬（名前は忘れた）が真中の辺りで鼻を土中につき込み猛烈に土を堀っていた。約一尺ばかりの深さに堀っていたと思う。その犬は、プール落成後もしばしば来て水換の日などはよく泳いでいた。もっとも臼井は、教室に出なくともプールには必ず居たからそれに従っていたのだろう。今その犬はどうしているか知らない。

その三、多分昭和5年の秋だったと思うが、日体と初めて対抗試合をやった。インターハイやカレッジには出ていたが、対校の試合は初めてであった。当日、敵は定刻より一時間半も遅れてやって来た。成城の方でも待ちくたびれ、帰ってしまった者も居た。とにかく馬鹿にした話しでカンカンになってやった。中途から雨が降って来て、相当難戦だったが、結局大勝した。私は50米で28秒6だったか、とにかく成城の新記録を作った。コースの定め方がすこぶるインチキで、敵の方は二・四・六のコースと初めから定めておき、名前を入れさせて提出させ、こちらは丁度具合よく三・五・七のコースに適当の者を入れ、メガホンで発表してやった。プログラム全部この手でやった。それ故、作戦も成功し、強敵をブラインドにするくらいの手品は軽くやった。後で考えてみると実に愉快になる。

回　顧

旧高第６回
Ｓ９年卒業　鈴木勝太郎

今年度コーチとしての感想を書けとのこと思い出づるまゝに私が今シーズン諸君と共に泳ぎそれにより私の得た體験と同時に諸君への希望を述べてみたいと思います。過去に於て水泳部々員として何等尽すことが出来ず又人間としてふしだらな生活を送って来た私は今迄何に一つ完全にやりとげたことがなかったのであります。こんな中途半片なやりっぱなしの生活が将来を如何にするか明かなことです。私が本年度コーチとして諸君と共に泳ぎ始めた時或人に「大学を卒業してぶらぶら水泳のコーチなどして」と云われましたが然し私は何か一つの仕事に熱と努力を以てやりとげ様と思う気持から年来水泳部のため何か役にたちたいと思っていたのでコーチをお引き受けしたのであります。勿論今迄の悪い習慣をおさえるためには非常な努力をして参りました。

在校生時代先輩から「その体とその泳ぎではもっと速く泳げないか」と云われたことがあります。今考えるとそれは自分の仕事に対しぜがひでもやり通そうと云う信念と熱と努力が足りなかったからです。今年諸君をコーチする一方自分自身をもコーチし何事も為せば成ると云う信念と熱を以て努力した結果今迄且って出たことのない記録も出て自分のベストと思われる域にまで達しこゝに一つの事を完全にやり通すことが出来たのです。この事は他の事をも完全にやり通せると云う信念を自ずと湧き上らせて来ます。これらの事は誰もがよく知って居ながら実行の出来難いことです。諸君も強き自分をつくるべくしっかりした自的信念のもとに努力実行して下さい。６月より９月迄諸君をコーチして参りましたが諸君には努力と熱と意気がたりないと思います。（これは全部と云うわけではありませんが）幸いインターハイでは皆の記録もよく良き成績を収めましたが七年制の時は記録は低下しています。集団労働或は其の他の事情はあったにせよ仕事に対する熱と努力が足りないからだと思います。これは労作に対しても勉学に対しても同じです。労作で提が出来たゞけでは駄目だと思います。本当の諸君の誠を以て造りあげたものでなくては。労作の為勉強のために水泳が出来ないとか遅くなったとか云うのでは未だ諸君のしっかりした信念・熱・努力が足りないのではないでしょうか。記録などは問題でありません。しっかり魂を打込んだ水泳をやられんことを希望いたします。魂を打込んで総てのことにあたると云うことは水泳ばかりでなく諸君等自身をも立派な人間として行く事と思います。私も来年は皇国への御奉公を今年得た尊い体験を以て無事にはたしたいと思っています。最後に甚だいたらなかったコーチをおわびしますと同時に来年度にはより一層強い信念と熱を以て一致団結水泳部のため努力せられんことをお願いいたします。

遺　稿

興津の生活

旧高第７回
Ｓ10年卒業　酒巻敏雄

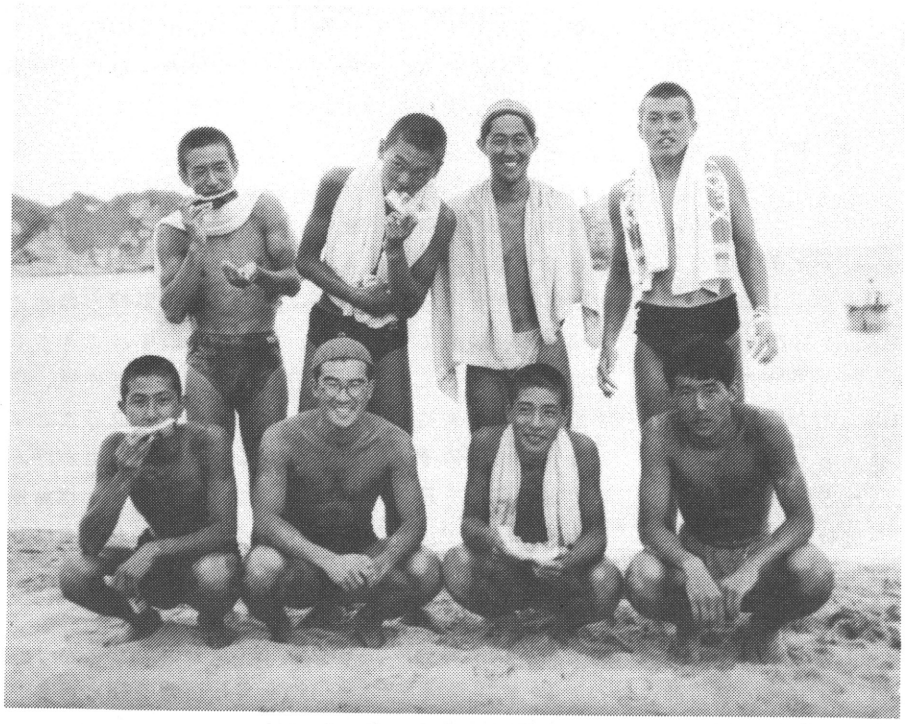
毎年、水のそろそろ恋しくなる六月、七月になると、興津の事が思い出されます。

「樽廻り」「遠泳」「水泳大会」の事や、和気あいあいたるインドアベースボールの事が次ぎ次ぎに思い出され、楽しい僕の夏のスケジュールが始まります。

成城が、夏の学校を興津に開いた最初の年から（たしか、僕が尋常科一年の時だったと記憶して居ますが）一回行かなかっただけで、十年近く参加しているので、我れながら驚いて居る次第です。それ程、僕にとって夏の興津は忘れる事が出来ません。最初の年は、勿論今のような寮などなく、線路ばたのお寺の本堂に泊るのでしたが、一年生の僕達のクラスの者だけ森さんのお家の方に御厄介になったので、気味悪い思いもしなくて済んだのは幸いでした。事実、一回でしたがお葬式があったので、僕達は「お寺に泊らなくて良かったね」と胸をなで下ろしたものです。

次の年から、家が二、三軒借りられ、そして最近あの寮が出来てから、成城が興津で名実共に独立した存在になり、居候の形から脱出しました。それまで本当に、「一中」の大きな寄宿舎が、しゃくにさわって仕方がなかったのですがほっとした感じでした。

僕が高等科になり、水泳部の方が丁度インターハイの練習でプールで頑張っている時なので、人手が



馬鹿しい事はありませんが、実際その時は、恨めしい空を眺めては心細く思いました。夏の興津では、天気の事も気になる一つです。この数年は、その点非常に恵まれて、二週間の水泳スケジュールが完全に行われ、水泳大会で千秋楽となって、ほっと息をつきますが、水泳大会といえば、去年は全員を紅白二組に分けて、点取主義の優勝争いをやったのですが、非常に好評で、今までと変ったやり方だったので、「帽子取り」や「西瓜取り」等、全員が闘争意識を発揮して仲々の力の入った場面を展開しました。之からも大会は紅白式の方法がたしかに良いと思って居ます。

興津に居る間の三回程の泳法のテスト、これが又大変なもので、試験そのものよりその後で行われる進級如何が問題です。コーチや先生方が、名簿と首引きで、いよいよ発表と紙に墨書して張り出すまで、あの本部の部屋まで来る人達を追い返したり、大変です。

最近は、全く泳げない赤帽の人達も僅かです。そのクラスは、林先生、山野先生が独特のテクニックにより、たちまち泳げる様になり、進級試験にはほとんど扇足も完全に出来る位になってしまいます。概して、クロールは上手であって、扇足の出来ぬ人が多いようです。練習しろと言っても、ついクロールの方が便利らしく、班別に泳法の下見をすると、以前と同じ事をやる人、扇足の逆をやる人はきまって逆をやるのにはがっかりさせられます。

何だか、まとまりのない思い出すままを書きましたが、まだ色々の思い出などある筈ですが、紙数の都合上、何れ他の機会に発表出来るものと思います。夏が終って成城へ行ってみると、お馴染の顔がグラウンドで飛びまわっています。そういったお馴染が出来るだけでも、僕の興津の生活は楽しいもので、有意義なものと常に感じて居ます。

足りなく助手となってから、心配の種はなんと言っても三哩の遠泳です。

潮の加減とか、特に波の高い日などは気にかかるものです。僕の尋常科一年の時、守谷の丁度「一中」の浜から、興津の浜までの遠泳の時は、天気が悪く波は高く、途中で雨さえ降ってきました。初めの人数五、六十人の者で、結局成功した者は六人だったと思って居ます。一年生がその中四人、僕と鈴木勝太郎氏と他に二人の者が成功して喜びましたが、舟の上の先生達は、雨や波で非常に御心配された様ですが、泳いだ当人達は夢中でそんな事はわからずに泳ぎ切ったのでした。たしかに遠泳では、舟の上の指導の先生方やコーチの人の方が気をもむものです。一昨年の遠泳でしたか、潮流に乗って泳いで居る者の列は乱れ、「一中」のある岬にぶつけられそうになってしまった事も（僕は、先頭の者が疲れて舟に上ったので、途中から泳ぎ、それ程と思いませんでしたが）、今から思うと、よく無事であったと、又良い経験であったと思っています。その時にも、興津の主である鈴木忠夫先輩の落ちつきはらった指導ぶりも、たしかにコーチの人達の良いお手本だと感じました。

いつの夏だったか、雨に降り込まれて困った年がありました。暑い筈の夏に寒い思いをする位、馬鹿

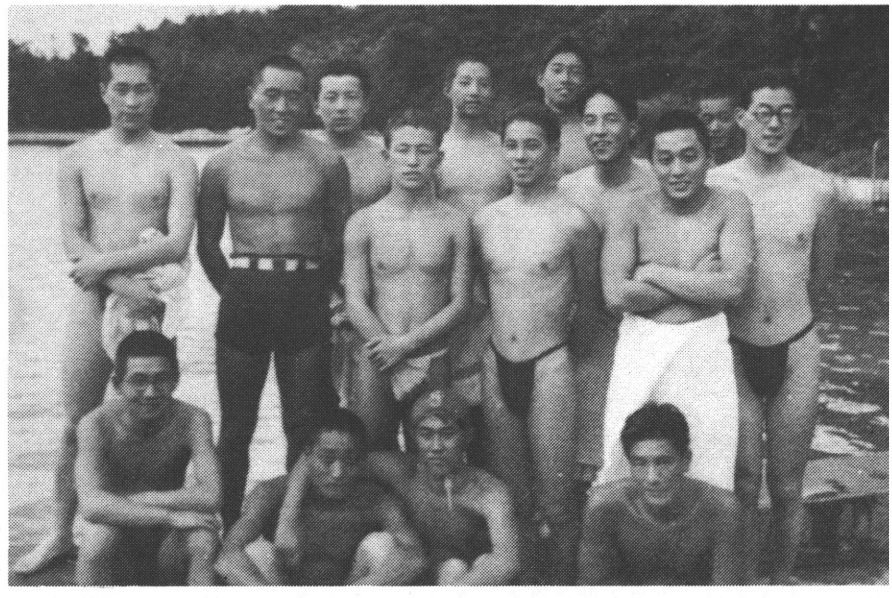
褌は命の守り

旧高第9回
S12年卒業　大西真博

昭和4年小田急が開通した年、成城小学校六年に編入試験を受けて入学し、夏休みは千葉県保田の日本寺で臨海学校を送り尋常科に入ると、上総興津で2週間程を先輩の野田、鈴木(恵)、真野諸氏の指導を受けて真黒に日焼けした。褌の結び方はこの時に教えて貰った。成城にプールが出来たのは昭和5年、夏と思う。プール開きに水泳大会があり、これに出たことを覚えている。水泳部に入れといわれて入り、七年制高校尋常科の東京高校と対抗戦があり、100メートル自由形、200メートル自由形に出て優勝したのが唯一の成績で忘れられない。その頃の水着は、褌の上に薄地のもので胸にSのマークがついていた。褌は必ずつけて泳いだが、最近の人は半パンツで褌は着けてない様だ。当時、5月5日より泳ぎ初めたと思う。プールの南側子供用プールの境の針金の塀に褌の色とりどりの幟が南風に翩翻とひるがえっている。まだ水温が低いので、プールサイドで甲羅を干すのが常である。そして、プール掃除は忘れられない。我々の頃は部員数が少なく、あの広いプールを掃除するのは相当苦しかった。マンベ(山口)、快助(竹尾)、謙三(守田)諸君は、真面目な部員でよく暗くなるまで残ってプールを洗ったものである。漂白剤のカルキをよく使い、素手でカルキの粉と水を捏ねるので手の皮が薄くなり指紋が見えなくなってしまう程で、勿論褌にもカルキ水が飛び散るので付着した所は漂白されて点々と白くなっている。大学を出てすぐ陸軍主計将校となり、ちょうど大東亜戦争直前に出征し12月8日はマレー半島で敵前上陸戦を戦って後、ビルマ進攻作戦で南へ北へ或は印度国境に緬支国境に戦い抜いて、昭和22年6月ラングーンを発つ道よくぞ生きられたと思うが、出征の時よりあのカルキの付着した褌は持って歩いた。将校行李が焼却命令を受けた時も、褌、は取り出して身につけて歩いた。これは必要でもあったからで、殆んどの河で雨季で戦闘が休みになると必ず泳いだ。ベンガル湾でも大波の中を泳いだが、いくら体力的に疲労していても水の中に入った時の気分、あのふわーっとした何とも云えない楽な延々とした気持ちは水泳部員の経験者でないと分からぬ。水の中はよきものである。そして戦争の最中でも苦しい時は尚更、学生時代の練習時の苦しさと比較してこの位のことではへこたれぬぞ！と思ったり又楽しい想い出が浮んで来る幸せを思った次第です。戦後今でも、福島県相馬の海岸で泳ぐ時に使っています。想えば褌は我が命のお守りであるといつも感謝しています。

上総興津を想って……

切り岸の岩場に立ちて竿投げる
釣を楽しむ朝のひととき
水底は陽光ゆらぐ岩かげに
さざえは見える海藻はらえば



前例左側より　館野栄一、守田謙三、山口宗樹、森美秀
中例左側より　平岡邦允、大西真博、倉上、神田已季男、深水正保、守田譲二
中村徹雄
後例左側より　中村俊平、浜田収、竹尾快助、雨宮春彦

現役時代思い出すままに

旧高第9回
S12年卒業　中村俊平

私が旧制成城高等学校で水泳部々員の末席を汚したのは、昭和9年4月から12年の3月迄のことであるが、卒業後2年程コーチという形で思い出のプールに通ったり、水泳会の理事として、鈴木忠夫先輩のお手伝いを若干させて頂いたので、その間のことを文字通り思い出すまゝに、書き綴ってみることにする。

但し、余りにも昔のことであり、且つ資料らしいものがなにもないので、記憶を辿っての記述であるから、或いは多くの誤りがあるかもしれないが、その点は御寛容を頂き度い。

現役時代の私達の最大の目標はインター・ハイであったと思う。次いで七年制高校の大会ではなかったろうか。この他には春のインター・カレッジの水球（ウォーター・ポロ）のリーグ戦ではなかったかと思う。インター・カレッジの競泳の方は、余り熱がなかったのではなかったろうか。今の私には、1年生の時に、故人になられた森清先輩、波多野先輩、河村先輩と組んで、200米リレーに出場したことだけしか記憶にない。このレースではトップの森先輩が流石にいい順位でこられたのに、第二泳者だった私のところで遅れ、アンカーの河村先輩の力泳空しく、最下位になってしまったように憶えている。プール・サイドから手を伸して、河村先輩を引き上げ乍ら全く恥しくてたまらなかった。

インター・ハイについては、1年生の時は家の事情で合宿ができず、通いで練習に出ることにしていたが、2～3日で身体の具合が悪くなって、遂々競泳も水球も出場できず、自分としても残念ではあったが、それ以上に諸先輩に大変御迷惑をかけて申し訳けなかった。この年は確か競泳はともかく、水球は第一高等学校と決勝で、大接戦の後惜敗されたと聞いている。

2年生の時は3年生に一人も部員がいなかった年だったので、主将だった大西真博君は非常に苦労されたことと思う。本来ならその大西君を助けて協力すべき立場だった私は、生来の怠け者の上に、遊んでばかりで、いかにして練習をサボるかに腐心していた有様だったから、今にして思うと大西君に全く申し訳けのない次第であった。

確かこの年は波多野、河村両先輩がコーチとして指導して下さったと思う。合宿中の猛練習で、平素怠けていた私はバテてしまい、プールに行って水面を見たゞけで胸苦しく、50米の距離がひどく長い距離に思われた。

試合の結果に記憶はないが、競泳の方は全員予選落ちの筈だ。水球の方は二回戦で静岡高校に大敗したかと思う。なにかあっけない負け方で、負けた気はしなかったし、不遜な言で申し訳けないが、それ程口惜しいとも、残念とも思わなかった。又、来年があるさ、と云った気持だったが、コーチの両先輩からは、今迄一高（第一高等学校）以外の学校に負けたことはないのに—。と、小言を頂いた憶えがあるし、閉会式に出ないでさっさと引き揚げたところ、プールそばの外苑の舗道で、故人になられた三橋達郎先輩から、大西君が我々を代表した形で、閉会式に出ないとは何事かと、大目玉を頂いてしまった。返す返すも大西君には申し訳けなかった。

この年の会場は、当時の私達の憧れの神宮プールであった。

合宿の顔ぶれは主将の大西君をはじめとし、那須一弥、山口宗樹、神田己季男の諸君と私は確かだと思うが、他に横河君、マネジャーの竹村君もいたように思うが、柴田君、伊藤泰二君については自信がない。

3年生になった11年は、私にとっては大変な年になってしまった。4月の新学年になって、大西君から都合で今年は泳げないから、従来の校友会関係の仕事はやるが、試合などの主将をやってくれと言われ、私は本心閉口した。既に述べたように、1年生2年生時代の私は、練習をサボる常習犯で皆なに迷惑ばかりかけていた人間なので、そのような人間が、今度主将になったからと云って、急に他の者に練習をサボるな、などとは面映ゆくて言えたものでなし、第一、みんなが私の云うことなどを聞いてくれる筈もない、と思い悩んだものだった。3年生としては私の他に守田譲二君と大野君がいたのだが、夫々の事情があって引き受けてもらえないのと、山口・神田両君なども助けてくれる、と云うことで遂に大役を引き受けた年だったからだ。

この年インター・ハイのためのコーチとして、ど

なたが合宿して下さったかは記憶にない。確か波多野・河村両先輩は京都帝大の水泳部の方の用で来られないと云って、6月頃一度学校に来て下さって、練習のスケジュールを置いて行って下さった。多分それに基づいて我々だけでやったような気がする。勿論暇をみては故人になられた中村徹雄先輩や、館野先輩が顔を出して下さったり、試合の時には館野先輩が来て下さったと思う。

この年は尋常科から竹尾君と森君が進学してきたし、私は春のインター・カレッヂの水球のリーグ戦の成績から、水球については秘かな野心を抱いていた。競泳の方はなんと云っても人数がいないので大望は無理だが、水球は自信を持っていた。

会場は東京帝大の地下の室内25米のプールだった。

予想のように競泳の方は残念乍ら竹尾君以外は決勝に出れなかったと思う。竹尾君の成績も残念乍ら記憶にない。水球の日のことはよく憶えている。7月末のよく晴れた暑い日だった。午前中に一回戦を行った。相手校がどこだったか憶えていないが楽勝だった。たゞ室内プールで初めての試合だったので可成り途惑いを感じた。午后の試合は東京高校が相手だったが、春のインカレのリーグ戦でも勝っていたし、今度も十分勝てるという気持で、東大前で昼食をしたのだが、ここで大失敗をやってしまった。みんなでカレーを食べたのだが、その結果試合で苦汁を飲むことになった。

東京高校との試合は、前半はリードして後半に入った。これで決勝へ行けると思っていた矢先き、二～三人気分が悪い、胸がムカムカすると言い出した。昼食のカレーが悪かったのだ。しまった！　と思ったがどうにもならない。メンバー・チェンジは出来ないのだから、泳げる者だけやる他ない。気分の悪い者はゴール横のロープにつかまって休ませて闘ったが、遂に逆転されて一瞬のうちに敗者の悲哀を味うことになってしまった。試合が終って風呂に入り乍ら、私は人前で初めて涙を流した。慰めてくれた理甲の大野健二君（彼も故人となられた）と二人で、暫く嗚咽したものだったが、このことはこれ以上触れまい。

意気悄沈した私らは鈴木忠夫先輩にお逢いした。「負けました。申し訳ありませんでした。」と、私は小声でお詫びを申し上げた。お小言を予期していたが、鈴木先輩は一言も小言めいたことは言われなかった。それだけに一層私は切なかった。

インター・ハイを中心にして、試合や合宿やらまだまだ思い出すことは多いが、次に七年制高校の試合のことを思い出してみよう。

七年制高等学校がどのような性質の高校だったかなどの説明をしている閑はないので、それは省略をするが加盟校は成城の他、東京高校（一高と共に現東大教養学部）、武蔵高校（現武蔵大学）、成蹊高校（現成蹊大学）、府立高校（現都立大学）であった。この大会は9月初めに競泳と水球が分けて行われ、各校共高校と尋常科（一般に中学校といわれたものに当る）を区分して競技し、夫々の順位をきめたが、水球だけは高校と尋常科が混合してチームをつくってよかったと思う。

1年生の時の会場は成城プールだった。高校の方は試合の前になって、主将だった森清先輩が都合で欠場されることになり、成績の方の記憶はないが東京高校が優勝したと思う。尋常科の方は最上級に山口宗樹、神田君らが居て優勝が期待されたが、こちらも東京高校にしてやられたと思う。水球の方はリーグ戦で平日にも行った筈だが全く記憶がない。然し行われなかった筈もないから多分優勝したと思う。当時のメンバーから考えると、そうとしか思えない。

2年生の時の会場は府立高校の新しい25米プールだった。高校の方は森清・波多野・河村・館野先輩が卒業され、代って山口宗・神田・伊藤泰・深水・柴田の諸君が入られたが、やはり力不足は否めず、優勝は出来なかった。尋常科の方も竹尾・森美秀の両君をトップに、守田謙三（譲二君の弟）、戦死された山口八郎（宗樹君の弟）、木村君らがいたが、これも優勝は出来なかった。この年確か丹沢君が1年生ではなかったろうか。丹沢君の兄さんが府立高校に居て私とは同学年だった。水球はこの年も優勝したと思う。

3年生の時は当番校が武蔵か成蹊だったが、プールの都合が悪いというので、会場には成城のプールが使用され、結局当番校のような形になってしまった。この年の高校は相当充実していたので、或いはという希望をもっていたのだが東京高校に優勝されてしまった。個々のレースでは竹尾君などの活躍で優勝した種目もあったが、つまるところは人員が少なく、出場種目にむらがあって総合得点で及ばなかったわけで、この欠陥は従来も、そして以後にもみ

第六回
水上運動會プログラム

昭和十一年九月二十六日(土)

於本校プール

役　員

會長	銅直先生
副會長	高松先生　副島先生
顧問	內田先生　小野先生　鈴木氏　臼井先生
審判長	中村氏
審判員	中村、山口、森、大西、横河、守田
時計員	館野(主)神田、伊藤、深水、永野
記錄員	入部、泉
出發合圖員	大野
通告員	山口(龍)
連絡員	濱田、內山
招集員	竹尾、山口(八)
總務	竹村

大會最高記錄

50米自由型	30秒4	原　(文甲三)	昭和 7年
100米自由型	1分17秒0	森　(玉　川)	昭和 6年
200米自由型	2分54秒6	竹　尾(尋　四)	昭和10年
400米自由型	6分13秒2	竹　尾(尋　四)	昭和10年
50米背泳	41秒0	那　須(文乙一)	昭和 9年
100米平泳	1分33秒4	高　橋(文甲一)	昭和10年
200米リレー	2分 4秒0	(森、波多野、河村、河野)(高一)	昭和 7年
150米メドレーリレー	2分10秒8	(大西、邦須、中村)(文甲二)	昭和10年
300米メドレーリレー	4分 9秒0	(臼井、河野(兄)、長與(兄))(高三)	昭和 6年

られた半宿命的なものであった。この年も水球は優勝したように思う。事実私らも練習においては、とかく競泳の方よりも水球の方を好んだし、又熱心でもあったように思う。

次は春のインター・カレッヂの水球のリーグ戦の思い出を書こう。

当時のインカレのリーグは、一部と二部に分かれ、一部は早・慶・明・立・東・日の各大学だったと思うし、二部は東京商科大学(現一ッ橋大学)の他、拓殖・法政・中央の各大学と、一高・東京・成城の各高等学校(武蔵高校は出ていなかった気がする)で、毎年一部の最下位校と二部の最上位校との入れ替え戦があった気がする。

会場は神宮プールの「飛び込み」用のプールだった。

1年生の時にはこのリーグ戦に出た記憶がなく、2年生の時は出た記憶はあるが、成績の方は全く判然しない。たゞ部員が少なかったのでメンバーが固定せず、当時ラグビー部の部員だった松本君や平岡君が、応援出場してくれたのだけは憶えている。

3年生の時には忘れられない思い出がある。この年私は私なりに、秘かに期するところがあったのだが、リーグ戦が初まって間もなく、自分の不注意から足首を捻挫して数試合欠場を余儀なくし、みんなに非常に迷惑をかけたが、みんながよく頑張ってくれて拓大と東京商大かに敗れたゞけで最後の一高戦になった。私らにとって一高を破るのは一つの悲願であった。私もまだ痛みが多少残っていたがこの試合には出場させて貰った。その日はリーグの最終日で閉会式が行われる為、一部二部全校の人々の見守る中での試合だったが、同点のまゝ延長戦となり、然も延長戦を四回繰り返して遂に引き分けに終った。神宮の森が大分うす暗くなる随分長い試合で本当に疲れた。この試合、最後の延長戦の時一高に先きに1点とられ、又やられるのかと思ったのだが終了も近い頃、竹尾君が可成り遠い所から見事にロング・シュートをきめて同点として引き分けたのだった。あの時の竹尾君のシュートした位置、得点をあげた時のみんなの喜びは今も忘れない。

宿敵一高に勝てなかったが負けなかった。このことがあったので先述のように、インター・ハイでも私は秘かに優勝を狙っていたのだ。この日のメンバーは、F·Wが神田・竹尾・森、H·B山口宗、F·B守田譲・中村、G·Kが平岡の諸君だった。

以上が対外試合の主な思い出である。

勿論、今こうしてあの頃のことを思い出して書いていると、細かいことがあれこれと浮かんでくるが、それらは全て省略させて頂こう。

慶応義塾大学の水泳部が、早慶戦のために50米プールで練習したいからと云って、プールの借用を希望してきて、これに応じたのも私の3年生の時だ。当時は大学でも50米のプールをもっているところは少なかった。これを思うにつけても、あのプールを

自分らの力でつくられた先輩方の労苦を忘れてはなるまい。

校内の行事としては、一学期中に昼休みを利用して行った水球の校内大会、9月の校内水上大会があり、3年間とも行われた記憶がある。

卒業した12年から13年の秋頃迄、何かと母校と関係をもっていたので、その間のことも書き綴ろうかと思っていたが、意外と枚数も多くなったし、この2年間のことは幸いにも、12年度主将の山口宗樹君、13年度主将の竹尾君が御健在のこと故、このお二方が書かれる方が適当だろうと思い、現役時代の3年間の記述に止めた。

余りにも主観的、懐古的な一文になってしまったが御寛恕を頂き度く、又この機に御指導を賜わった諸先輩、御助力を惜しまなかった同輩諸君の御健康と弥栄を祈り、且つ又、故人となられた方々の御冥福を心から祈念して拙文を終り度い。

思い出は
　老残の身か
　　かりたてゝ
水しぶきあぐ
　　夢をみせしむ

昭和12年頃の水泳部活動

旧高第10回
S13年卒業　山口宗樹

戦前の日本の水泳はオリンピックで日の丸を掲げた黄金時代にあった。高石・鶴田・入江・清川・牧野・北村・小池・宮崎・寺田・葉室、そして根上・遊佐・新井と次から次へと世界記録を書替える選手が輩出していた。毎年夏の日米対抗戦やオールジャパンの水泳競技会は神宮プールを満員札止めにして居り、ラジオは連日実況を放送し新聞では戦況をトップ記事で取上げていた時代である。その中での我々成城高校の水泳部の活動はレベルの高い記録を望むべくもなかった。然し三橋先輩から受継いだポロの技術や成城らしい運動部生活は部員としてすごした全員が其后の何十年かの人生に生きてゆく人間の糧として心の中に持ちつづけて居り、又社会生活の中に人間とはこの様に心を豊に生きるものだと云う、ほのかさを発散したものと思う。之が皆の克ち取った成果ではなかったでしょうか。

当時のスポーツに対する成城の全学的対応を思い出して見ると自由教育、全人教育を標榜した沢柳先生、小原先生の理想が開花していた時代だったと思う。真善美が人間の磨かねばならない徳育であり、他人を押し除けて卑怯なやり方で勝つことは本当の勝利とはされなかった。学内の運動会でも一等になることよりも全力を出して完走することが最良とされ1等賞と云う賞品などはなかった。

当時の水泳部員がここで云う理想的なスポーツマンばかりだったと云う積りはないがどこか心の奥に培われていて、何かイタヅラをしても限度とかけじめがあった。それが先程申し上げた我々の心の糧だったのではないでしょうか、懐かしい思い出である。

次に当時（昭和10年より14年頃）の水泳部の試合や行事、特に印象に残った事柄を記して見る。

○　**七年制高校関東水上競技大会**
　高等科・尋常科の別の競泳とポロ

○　**関東学生水球リーグ戦**
　大学、高等学校、専門学校、合同のリーグ戦で1部・2部・3部に強さで分れていた。

○　**インターハイ東部予選及全国大会**
　この期間全国大会出場は昭和13年のみ

○　**関東学生水上競技大会**

この中で昭和13年春の関東学生水球リーグ戦のプログラムを書写して見る。

第14回関東学生選手権水球リーグ
　於明治神宮外苑水泳場
自昭和13年5月21日
　至昭和13年6月19日
会長　末弘巌太郎
役員長　藤田　明
参加校
　第一部　早稲田大学、慶応義塾大学、東京帝国大学、立教大学、明治大学、拓殖大学、日本大学
　第二部　第一高等学校、東京高等学校、府立高等学校、東京商科大学、東京文理科大学、法政大学
　第三部　成城高等学校、中央大学、東京慈恵会医科大学、国学院大学、青山学院

成城高校のメンバー
1竹尾快助（ＨＢ）　2入部辰市

3 守田謙三（ＬＦ）　4 山口八郎（ＲＢ）
5 木村和一郎　6 犬丸純男
7 浜田　収　8 内山四郎（ＬＢ）
9 穂坂博明（ＲＦ）　10 松浦英夫（ＧＫ）
11 中村勝秀　12 平野直人
13 馬島　郁

成　績

5月28日（土）　対国大　18－0　勝
5月29日（日）　対慈大　8－0　勝
6月11日（土）　対中大　6－5　勝
6月19日（日）　対青学　7－0　勝

6月11日の対中大戦が事実上の優勝決定戦であった。その得点経過は次の通りです。

前半　2－1
成城　6　後半　1－2　5　中大
延長前1－0
〃　後0－1
再延長前1－0
〃　後0－1
再々延長前0－0
〃　後1－0

再々延長終了1秒前味方の4ヤード線上よりの竹尾のロングシュートが決り三部で優勝した。当時の試合時間はハーフタイム迄正味7分で延長は3分宛前後半であった。反則時は全員現位置を動いてはいけない。選手の交替は認められない。

その他この昭和13年度の成果は次の通りである。

インターハイ関東大会で第2位となり全国大会に出場した。京都に遠征、100米自由形で六高の荒玉に次いで竹尾が第2位となった。

関東学生水上競技大会

竹尾100米自由形で優勝タイム1.04秒0この成績により東京オリンピックCクラス候補として選ばれる。実際には東京オリンピックは戦争のため中止。

チームとしては二部より一部に昇格。

次に第6回関東7年制高校水上競技大会

昭和13年9月17日、18日　於成城

成　績

高校1位東高	76点	尋常科1位東高	93点
2位成城	72点	2位成城	58点
3位府立	56点	3位府立	50点
4位武蔵	28点	4位成蹊	44点
5位成蹊	26点	5位武蔵	13点

大会記録

100米自由	1：05・4	竹尾 成城	S 11
200米自由	2：31・6	竹尾 成城	S 11
400米自由	5：27・6	鈴木 東京	S 11
800米自由	12：23・6	仙葉 成蹊	S 12
100米背泳	1：17・6	鈴木 東京	S 11
200米背泳	3：05・6	鈴木 東京	S 12
100米平泳	1：20・6	錦織 東京	S 12
200米平泳	2：59・0	錦織 東京	S 12
200米継泳	2：01・2	東京	S 11
800米継泳	10：40・8	東京	S 11
300米混泳	3：51・8	東京	S 11

ポロは東高に次いで第2位

以上が特記事項であるが、この他に毎年千葉県興津守谷海岸の夏季水泳実習の手伝いに有志が出掛けた。

次に私自身の成城水泳生活の感懐を少し。

尋常科時代の水泳仲間は神田己季男、鈴木二郎、松本剛、浅野、白山、倉上、馬杉の諸君でしたが、高校の卒業迄選手生活を続けたのは神田己季男君と私の二人だけでした。その頃記憶では楽しく、辛くて強く印象に残っているのはプール掃除であって、カルキの臭い、腐敗した泥水の異臭の中で土曜の昼過ぎより日没迄15人程で懸命にそして冗談を云い乍ら働いた数時間、デッキブラシ、竹箒等で炎天の中で汗をたらたら流し乍ら苦労した重労働はなかなかのものでした。試合の思い出としては昭和11年の春の水球リーグ戦での事でした。対一高戦、丁度日蝕の日に当り、試合中に夕暮の様な暗さで、異様な雰囲気を醸し実力伯仲の両校対抗意識を彌が上にも駆り立て大変印象に残りました。試合の方は三回延長しましたが勝負がつかず、5対5で引き分けに終り誠に残念でした。競泳ではインターハイ関東予選の400米予選競技で100米をターンした後、浮上って来た時に頭にコースロープが触れたので急いで右え浮上した所、之が隣のコースで、前を見たら他人が泳いでいるではありませんか慌てて元に戻って400米を完泳しましたが、やはり失格して満場の失笑を買いました。当時は部員の数も少く特にポロの試合が棄権にならない様選手を確保する事が一苦労だっ

た事を憶えて居ります。

我々の時代は戦争の時代だった為、先輩、同僚、後輩の水泳仲間が軍隊に応召され戦地に赴き戦死された方も沢山居られます。昭和14年度の主将をつとめた私の弟の山口八郎も海軍の航空将校として昭和20年に九州の佐伯基地沖にて戦死しています。この戦争が無ければ水泳会としても古い年代の元気の良い先輩達が沢山居られる事でもあり、甚だ残念であります。この方々に哀悼の意を表し筆を置きます。

プレイバック50

旧高第10回
S13年卒業　神田巳季男

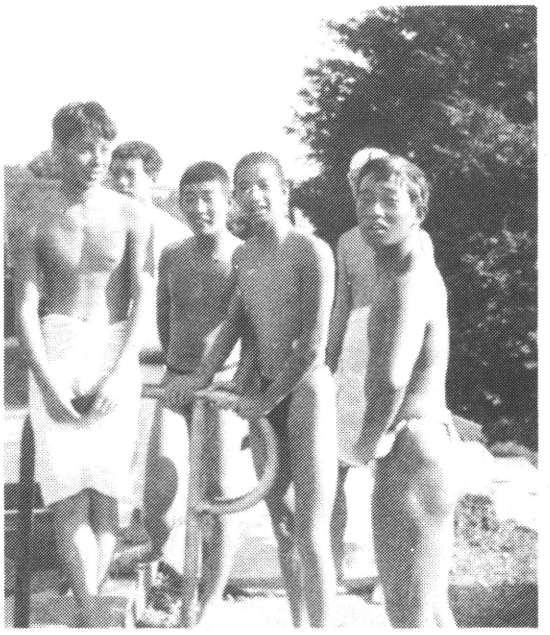
なにか書けと云う。ほかならぬマンベエさんこと山口宗樹新会長からのお話しとあっては、むげにお断りするわけにも参らない。記事の余白の埋め草がわりになればそれで結構とのこと故、思い出すままとりとめもなく駄辯を弄し恥をさらすことにする。

マンベエさん、それにオンペさんこと中村俊平さんはじめ多くの在籍学友諸君には、なにかと大変お世話様になりました。なにはさておき、先づ冒頭で当時の知遇に対し謝詞を呈しておかねばなるまい。また、生来野放図でチャランポランな性格の故に、いろいろと嫌やな思いをさせたり、御迷惑を掛けたことも少なくなかった事と忸怩たる思いで、あわせて紙面を借りてお詫び申し上げたいと思う。

お蔭様で、と云うと少々大げさになるかも知れなが、成城時代の若き日々を水泳部在籍の諸学友と共に楽しく、愉快に過ごさせてもらい、折にふれては当時を思い起こし懐しんでいる。

還暦という人生の一つの峠を超えてからは、目に見えて老化現象が進行し、時どき腰痛などに悩まされる今日此頃で、そんな折にはもう歳だなと気分も滅入り勝ちになる。しかし、ロッキングチェアによりかかり目を閉じて成城時代の若き良き日々を回想し、あれこれ想いを巡らしていると、また何クソと心身ともに元気が出てくるから不思議だ。まことに安直で手軽なまたとない回春法と云うべきか。

学生時代に幸運にもよい友に恵まれ、楽しい思い出づくりが出来るとゆうことは、きびしい社会生活の荒波を乗り切って、自らの人生を切り開き、つき



左側より　神田、中村　　浜田、竹尾

進んでゆく上で、何ものにも換え難く貴重なものではなかろうかとつくづく感じている。

曲がりなりにも部員らしい形で私が水泳部に在籍したのは高校２～３年生の頃で、当時主将は中村俊平氏、同氏が卒業して東京大学に進学したあとは山口宗樹氏が主将をつとめていたように記憶している。もっとも尋常科の頃にも一時期水泳部に入部していたこともあったが、尋常科の生徒の場合は泳ぐことの好きな連中がただなんとなく集って水に親しむといった程度のことで、きびしい練習を課されるということもなく、試合に出場することもなかったように思う。

その当時学園の教育方針は、その伝統は今に引き継がれていると思うが、徳育の面では真善美三位一体の成城ボーイとしての人格の形成、智育の面では暗記力に頼った安易な詰め込み主義を排し、ダルトンプランによる自学自習を中心とした自主独立自ら学ぶ姿勢と方法の体得に力点が置かれていた。学生達は学習のための教科の時間割を各人自らの手で作製し、それにもとずいてそれぞれの教室に赴き、異なる各年次、各学級の生徒が入り混って自学自習によって授業を受けるという極めて自由且つ自主的な環境のもとで伸びのびと育てられていた。

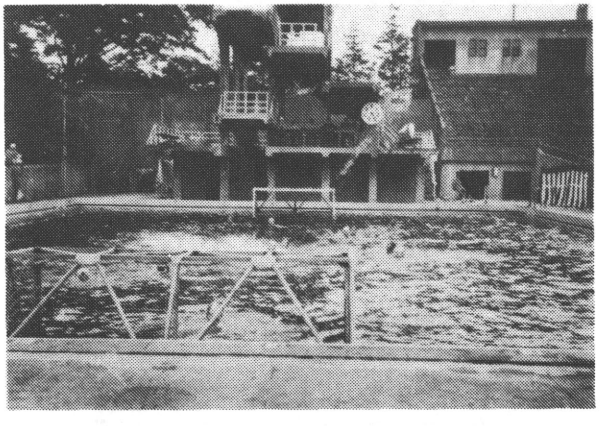
このような教育方針は、運動部などの学友会の課外活動にも色濃く反映していた。

運動部には、いわゆる選手制度と云うものが存在しなかった。勿論サークル組織として部の運営に最少限必要な部長、主将、マネージャーは居ても、専任の監督は置かず、コーチも卒業生が事情の許す範囲内で手弁当で後輩の指導に当るといった具合で、ほとんど全てが部員達の自主的な運営に任されていた。

したがって、いわゆる職業的選手の養成ということとは全く無縁で、各運動部は全ての在校生にその門戸が開放されており、学生達は誰もが気の向くままに好きなスポーツで放課後のひと時を好みのままに自由に楽しむことが出来た。まさにビバ成城である。

当時のわが国水泳界の情況に目を転ずれば、宮崎（慶応）、遊佐（日大）などの逸材によって100米1分の壁が破られ、多くの優秀選手が輩出、松沢、田畑など不世出の名監督に率いられた水連は我が世の春を謳歌しており、高校水泳界もまた活況を呈していたし、わが水泳部もその一翼を担って一つの時代を形づくっていたように思う。そんな中で、スポーツはただただ楽しむものと心得、チャランポランで、ろくすっぽ練習もしない私が周囲の目にどのように写ったかは想像に難くなく、どうしようもない自堕落野郎であったことは、まことに慚愧にたえない。

そんな私ではあったが、水泳部の一員としての部活動を通じて貴重な教訓を単なる言葉としてではなく、体で文字通り体得させてもらえた事に感謝している。それは苦しみに耐えてロングを引き泳ぎ込むことの重要さであった。基礎体力の充実、向上は単に記録を伸ばす上だけでなく、何事を成し遂げる上でも普遍な原則であるとゆうことである。



昭和13年9月　関東学生リーグポロ決勝

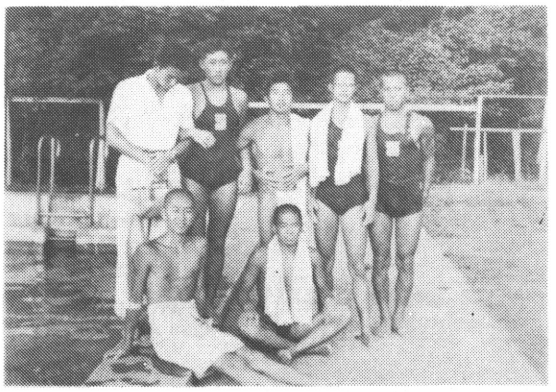
何分にも半世紀近くも前のことであり、記憶の誤りや思い違いもあろうかと思う。思い出とゆうものは人の心の中で温められ、長い歳月の間に不当に美化され勝ちであることと御容赦願いたい。

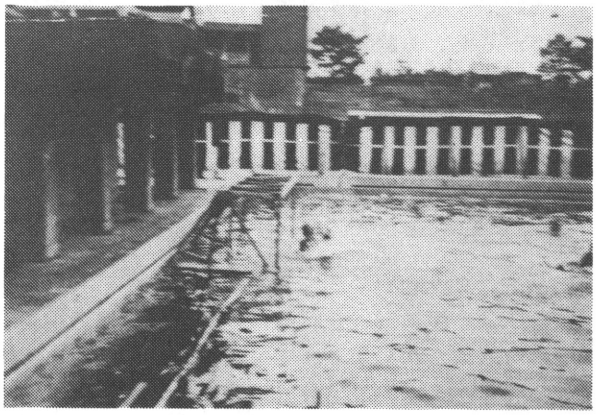
プールのうち・そと

旧高第11回
S14年卒業　竹尾快助

1933年の秋のこと、プールに集まれ、と誰からともなく伝え聞いてプールへ出向いた。シーズンオフで干上ったプールのコンクリートの大きな槽の中で何人かが走り廻ったり壁に寄り掛って居た。走り廻る少年達の姿と日に照らされた壁とが眼に残って居る。小原先生復帰運動の一コマ、高尾山籠城のスタートはこのプールであった。

水泳部の仲間入りをしたのが、この年だったか次の年だったかはっきりしないが、七年制高校水泳大会の間近な頃だった。プールを横に25米を折返して練習して居る中に混って泳いだ。興津漁師を自負する森美秀君がクロールでいつまでも泳いで居るのに驚嘆した。私は50米か100米かで息を切らしてしまった記憶がある。この後の七年制大会では800米リレーのスタートを受持つことになり、2位をプール一つ離して引継ぎ、一寸した自信を得た。然しこの大会でシーズンを終り次の年から本格的に水泳部の練習を始めた様に思うが、尋常科時代のプール生活では思い出す事がほとんどない。森美秀君が議員を引退した後にでもゆっくり思い出を繰り出したいものである。ただ1935年（4年生のとき）東京市中等学校水泳大会が市立一中の室内プールで開かれ、大西マロさんに連れられて出場し、タイムレースの100米自由形で優勝したことがあった。タイムは覚えて居ないが、1分10秒前後だったように思う。ともかく東京の中学生の水泳のレベルの低いことを思い知ったことだった。今日日本一の女子中学生が東京のプールから育ったことを思うと不思議な気がする。今一つ強烈な思い出はこの年に府立高校で開かれた七年制大会で、2日目の第一レースの200米リレーに遅刻してしまい、応援の大場景雄君に代役を勤めてもらったことである。『ショーガネーナー』で済ましてもらった様だが、思い出す度に恥かしい。





高校時代の競技の思い出は最終学年の1937年の関東学生水球選手権大会の第3部での優勝とインターハイの関東予選で総合2位になり全国大会に出場したことだろう。

水球では、最終戦が中央大学が相手で、勝った方が優勝ということだった。試合は同点の後、二回の延長戦でも勝負がつかず、三回目の延長戦も同点のまゝで終ろうとする、そのタイムアップ直前にロングシュートで得点して勝った。その時のことは多少大袈裟に覚え込んでしまったかも知れぬが、タイムアップ直前に味方のゴール直前でボールを受けて、正面を見たら飛込台に据えてある時計の針はほとんど真上を差していた。咄嗟に相手ゴールを目がけて思い切って飛げた。相手のキーパーが身構えもしないうちにゴールインしてタイムアップ。出鱈目なプレーだったが気分の良い思い出として残して居る。

インターハイは八高が圧倒的に沢山点を取ってしまったあとのドングリの背比べの中で我が成城がチョット抜け出してしまったので2位になってしまった。バタフライを織り込んだ平泳の守田謙三君、この年になって狂った様に速くなった浜田収君の活躍で上位入賞を果したからだ。私はこの時100米の自由形と背泳に出場した。日頃練習して居た自由形では2位だったが、背泳は穴をねらったのが効を奏し、1位という面白い記録を残した。

全国大会というものなど意識して居なかったし、中にはそんなものがある事を知らない人も居た程だったのだが、京都の先輩達の絶大なお世話で、たのしい遠征をすることが出来た。この大会では末席を全うした。この時のことを思い出す度に先輩諸兄に感謝をするのだが、その当時、有難うございましたを言ったかどうか危ぶまれる。改めて『有難うございました』。

今一つの晴れがましい記録がある。関東学生選手権大会に出場し、100米自由形で優勝し、選手権者になったことである。当時は水泳有名校は全日本学生に推薦出場するので、地方予選大会の様な性格になって居た。それでも、名前だけは関東学生選手権者なのだから、これも一つの記録として残してよかろう。この時のタイムが1分4秒0で、来るべき幻の東京オリンピックのC級候補者に選ばれてしまった。勿論強化練習に呼び出されることもなかったようで、名前だけを頂いた次第である。

最後にプールへ戻ろう。

高校3年のシーズンを終る最後をプールのほとりでのすき焼会で納めた。小プールとの間にあった屋外灯の光のもとで鍋をかこんだ。今は亡き山口八郎君、内山四郎君、浜田収君等の顔が眼に浮ぶ。宴が終った時10月の冷たいプールに飛び込んで対岸まで泳いだ。一糸纏わぬ姿で。

これをしも青春と言わんか!!

昭和16年　神戸大プールにて　山口八郎